教会教育

昭和二十八年六月十日第三種郵便物認可

昭和三十六年十一月一日発行　毎月一日発行　第九巻第十一号



11

1961

聖書における教会

1961 **11** 目 次



教育週間

生徒大会

第11回キリスト教教育週間を迎えて私たちとしては始めての試みである教会学校生徒大会を九月一七日午後、台風の過ぎ去った秋晴れの下で開催しました。大会に先だち近隣の町から集るCS生徒を迎えるために私たちは美唄駅に集り、そこから二台の宣伝カーをつらねて市内パレードに入りました。それぞれの手に生徒大会の小旗をもち、「ぼくらの希望はキリスト」「行こうキリストと共に」「子供をキリストへ」などのプラカードをかかげ、子供さんびかを歌いつつ行進しました。赤旗と労働歌で渦巻く炭礦の町には、このような静かなデモは市民の足を止めさせる効果がありました。宣伝カーのバルコニーからは「健康なからだと共に健康な心をつくろう」とキリスト教教育のすすめをいたしました。

生徒大会は各校CS生徒代表と先生方のことばに続き、教育週間の主題である「あなたの隣人を愛せよ」とブラウンリー宣教師よりすすめがあり、それに答えて、東南アジヤにお医者さんを送るため献金をささげて生徒大会を終了しました。大会後に全員で記念撮影をし、親睦会をもって解散しました。午後五時より北海道名物のジンギスカン鍋を囲んで教師夕食会を開き、生徒大会の反省などを語りあい、CS教師としての新しい決意を与えられ、一同と共に感謝の祈りをささげて、この日の行事を終りました。　（飯沢忠記）

この他大阪・京都でも第二室戸台風の災害にもめげず行われ、講師の到着が二時間おくれたりしながらも熱心なよき会がもたれた。





われわれはわれわれの全存在をもって真理に堅く立って頭なるキリストとの一致に成長せねばならぬ。われわれは、道であり真理であり生命なるキリストとの一致によって、すでに真理を得ている故に愛をもって真理を語らねばならない。それは主は頭でいまし、われわれは主に組み合わされ、しっかりと結び合わされているからである。教会は、その各部がその当然のつとめを果している時にたてられるのであり、教会はその会員が頭から生命を得ている時に力があり、愛によってたてられるものである。

このような共同体は、初代教会においては容易にできたものではなかった。そうでないならばあのように偽教師たちの悪巧みや、道徳問題による分裂などに対して警戒がされるはずがなかったであろう。共同体というものはただ一緒にいるということではなく、人間がその力において達成し得るより以上の深さを持ったものである。われわれはここで基調としてのみ言、すなわち、「キリストから賜わる賜物のはかりに従って、わたしたち一人一人に恵みが与えられている」というみ言にもどって、われわれはキリストに属するものであるという理由でわれわれの間に一つの共同体を達成し、そしてこの共同体の中で「奉仕のわざ」をなし得るのであるということを悟らなければならない。

課題

新約聖書にある教会がどのようなものであったか、これを描写することは容易ではない。これについて学べば学ぶほどこれを性格づけることがむづかしくなる。これは種々の名で呼ばれている、すなわち「我が名によりて召されている」「私の母、私の兄弟」「主の宮」「神のイスラエル」等々

一、新しい契約

マルコ　一四・二四
Iコリ　一一・二五
エレミヤ　三一・三一

イエスは、神がアブラハムと結ばれた契約の共同体に属しておられた。パウロはアブラハムは「私たちすべての父」と呼んでいる（ロマ四・一七）。このイスラエルとの継続性は初代キリスト教にとって基礎的なものであったが、しかし、そこには多少の相違点があった。すなわち、約束のメシヤはすでに来り給うて新しい共同体の活ける主であり給うからである。

キリストにおいては、神がその民と新しい契約を結ばれ、われわれはその新しい契約の相続者である。又われわれは教会であって、イスラエルの歴史を共に分つものである。この契約の履行はイエス・キリストの生と死とその復活とによって完遂され、ペンテコステにおける聖霊の経験と教会の継続的生命にある活ける主につける経験において完うされている。これは種々の方法を通して教会の生命の中に示されてはいるが、同時に、それは今もなおイエスが「この杯は、私の血による新しい契約である、飲むたびに、私の記念としてこのように行いなさい」（Iコリ　一一・二五）といわれたみ言を中心とするものである。

教会はこの契約によって神に結ばれており神は教会が不忠実であった場合にも常に真実であられる。そして神はその民が頑固にこれに反いた時にも、その御目的のためにその民をお用いになることができるのである。この契約の自覚がその共同社会の生活に構成を与える、それはイエスが律法と預言者とを完うするために来られたことを意味するからである。われわれは道徳律によって律せられ、義にあり給う主に従い、主がわれわれに求め給うところの「ただ公義を行い、いつくしみを愛し、へりくだってあなたの神と共に歩むこと」を忘れてはならない（ミカ六・八）

ランドルフ・C・ミラー

聖書における教会

聖書　エペソ　4・4–16

解説

教会は「キリストの体」と同一体であるとされて、その一致に重点が置かれている。その一致の基礎は「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ」と明らかにされている。したがって如何なる多様性もこの共通な基盤から出発しているはずである。ここに「一つ」という言が七度繰り返されているが、この一致についての背景に対して、われわれの使命の意味を見ることが出来る。

われわれは神の恩恵によって（ディビジョン）分離でなく多様性——が一致を助けるものとして支えられたと教えられている。神の賜わる賜物は「わたしたちひとりひとりに」支えられていて、この限られた賜物を互いにおのおの分つことによって、教会はみんなから捧げられて完きつとめを持つようになるためである。キリストの死とその復活の故に、われわれは特種の目的に対するこれらのつとめに働くことになっている。それは兄弟たちは「キリストの体をたてさせ」るために「奉仕のわざをさせ」るように整えられることになっているからである。

われわれがその目標に到達するに「至るまで」というのは共同体的努力である。われわれは皆、一つの交わりとして一緒に働いて「信仰の一致」に到達することになっている。これは決して孤立した一個人の達成ではないので、それは個人の達成ということはグループが充分に発達してはじめて達せられることであるからである。われわれの人間性の充分な満ちみちた徳というものはキリストの体である教会を通してキリストのみちみちた徳のうちに見出されるものである。そのわけはわれわれがキリスト者の共同社会のうちにあって充実した信仰に到るのであって、かくしてすべての反対に対して堅くたち向うことが出来るからなのである。従って各個人は神の民の共同社会の中にあっての神と自分との個人的関係という意味で彼自身に特有の完成を遂げ得るのである。神はわれわれにこの一致と充実とを与えられているが、われわれは、これを自分のものとするためには自分で努力して、これに到らねばならぬのである。そのためには「神の子を知る知識」と共に、主への信仰による委任ということを要するのである。われわれの成長の充足ということは「キリストのみちみちた徳」という意味においてである。

この充実なくしては教会もその会員も人々の悪巧みによって起るさまざまな教えの風に吹きまわされるようになる危険がある。

る」といっている。（Iコリ　一〇・一七）
　大体組織的なことが霊的なことを薄くしてしまう恐れがあるのであるが、これは教会の歴史にも時々起った。そしてこの組織的な面は重要なことではあるが、同時に組織のない霊的団体がややもすれば消えてしまいやすいと同じく、危険性を伴う。従ってわれわれは両者の正しい均衡を保つように努める必要があり、これをわれわれは新約聖書に見出し得るのである。

四、キリストの体

Iコリント　一二・二七
エペソ　四・四―七

「あなたがたはキリストのからだであり、一人一人はその肢体である」（Iコリ　一二・二七）この類似は決して生物学的正確さをもって考えるべきではなく、そのからだを構成している各部らとその頭との有機的関係を強調しているのであって、誰でもキリストの体の一員となった場合にその人に重要なことが何か生ずる。すなわち「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である」（IIコリ　五・一七）であって、たとえ各自は個人として存続していても、その個人個人は、もはや一個の私人としてあるのではなくその個人個人はキリストの新しい人間性に合って、その新しい位置において、彼らは再び改変できぬように互いに結び合わされてしまっているのである。
　この体には一致があるしかも各人はそれぞれ異なった任務を持っている。ちょうど目、足、耳がそれぞれ異なった任務を持っていると同じく教会員は神の恵みによって召されて各種のあかしえと召されている。しかも彼らは皆再び改変出来ないようにこの体の頭なるキリストにおいて一つになっているのである。
　教会の主要性格としてキリストの体ということをあまり強調し過ぎると、教会はとかく内向的になってしまう恐れがある。すなわち自分の健康ばかりを考えて排他的な共同社会となってしまう。しかしキリストがその体の頭であるならば、これに属するものはこの世に主を代表せねばならぬ。これが個人的、社会的な倫理の基礎となり、教会の宣教的な発展に対する基礎となる。もしキリストが全人類のために死なれたものなれば、その体につらなる肢体たるものとしてわれわれは全世界にのばされる腕であるわけである。

五、コイノニヤ

使徒行伝　二・四二
Iヨハネ　一・三、四・二〇―二一

　コイノニヤとは仲間としての交誼、親交、共同社会、共有及び参与というような意味である。ペンテコステにおいてバプテスマをうけた最初の回心者たちは「ひたすら、使徒たちの教えを守り信徒の交わりをなし共にパンをさき、祈りをしていた」（使　二・四二）と伝えられている。パウロは「御霊の交わり」（ピリピ　二・一）といいまた、キリストの血と体とにあづかる（Iコリ　一〇・一六）ということをいい、さらに「神は真実なかたである。あなたがたは神によって召され、御子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに、はいらせて頂いたのである」（Iコリ　一・九）といっている。
　神との交わりの故に、われわれは聖霊の交わりのうちに入ることができる。しかし、この特権があまり軽く考えられやすい、人と神との交わりとは、その隣人との交わりであり、またその隣人との交わりは、また神との交わりということになる。「神を見た者はま

二、神の民

ペテロ第一　二・九
出エジプト　二九・四五
ガラテヤ　六・一六

教会は「神につける民」（ペテロ第一　二・九）である。そして一つの家族、国家に属する如くに個人は「信仰の一家」（ガラテヤ六・一〇）に属するものである。そしてその一員たる資格を継ぐと共に、その市民権を施行する。このグループは「そこにはもはやギリシャ人とユダヤ人、割礼と無割礼、未開の人、ユクテヤ人、奴隷、自由人の差別はない。キリストがすべてであり、すべてのもののうちにいますのである」とある通りそれが主要なことなのである（コロサイ四・一一）。

このメンバーシップというものは、神の賜物であり、しかもこれは、われわれが受取らねばならぬものである。「あなたがたは以前は神の民ではなかったが、今は神の民である」（第一ペテロ　二・一〇）神はその民をそのあわれみをもって創造し、これに対して民らはその大いなるみ業を讃える。このことは神のなし給うことで人の力でない。「わたしは、あなたがたの父となり、あなたがたは、わたしの息子、娘となるであろう」（Ⅱコリ　六・一八）とある。

こうした教会観は重要な結果となる。すなわち教会は神が全世界の主であり給うが故に歴史の中にもたらされたものであり、従って、その意味は天地創造のはじめに帰り、イスラエルを神の民と選び給うた時に帰すことによって知られると共に、その歴史はペンテコステにはじまるのである。又教会の公共の生活は神によるが故にその実体はこれに所属するもののよさによるものではない、唯それらが神からの賜物であるが故にわれわれの従順を求められる神の主張は絶体である。神の恵みはわれわれの信仰に先行し、神がまずわれらを愛し給うたが故に、われらは愛するのである。

三、エクレシヤ

Ⅰコリント　一・二、一〇・一七

教会は召し出されたものたちである。エクレシャという言は、新約聖書においては単一の共同社会、全教会、且つ諸教会等を指している。（Ⅱコリ　一・一、Ⅰコリ　一〇・三二、Ⅰテサロ　二・一四）今日もわれわれはある一つの教会に行き、一定の教会に属し、同時に「聖なる公同の教会を信ずる」。これは人口の集まりであると共に召し出されたものたちの共同体である。

初代のエクレシャには二つの要素があった、即ち㈠その共同社会の個人的関係において考えられていて、このことは多分に一番重要な面であるが、㈡それは、またその初めには如何にも原始的なものであったにせよ、一つの組織体としての体形を持っていた。そうした体形がこれが存続出来るような一つの永続性を与え、一方礼拝を目的とした信仰者の集まりであったことが、これに内的な力を与えたのであった。

はじめに、使徒的にも又職務的にも教会の奉仕についていえば、パウロはいつもイエス・キリストにおける信仰と神のあわれみという広い内容のうちにおける奉仕のことについて語っていた。彼はバプテスマについては既定のこととして、「あなたがたは主イエス・キリストの名によって、またわたしたちの神の霊によって洗われ、きよめられ、義とされたのである」（Ⅰコリ　六・一一）といっている。彼は又聖餐を原始的共同社会の礼拝の中心に発見し、それが一致の業としてこれを見ていた、「パンが一つであるから、われらは多くても、一つのからだなのである、みんなの者が一つのパンを共にいただくからであ

た。神の贖罪愛は聖霊の力を通して教会員の中に働き、彼らは神の贖罪の導厳となった。しかし教会は審判されることとなり、御国は充分に出現しなかった。

これがわれわれの今日立っているところである。人はキリスト者共同社会の中でクリスチャンとなる。このことがキリスト教教育のために問題を明かにしてくれる、そのわけは各個教会が真の教会となるようにという要求に鋭敏になるのでなければ、とても真のキリスト教教育は行われないからである。現在のままの教会において考えると私共は悲観的ならざるを得ないが、新約聖書に教会をもって、そのあるべき理想の姿に対照して見るならば、神は誠に微妙な方法を以って働いておられ、神は今日の教会を通して働いておられることを悟るであろう。

神の民の生活を改新することは常に可能なことである。神の恵みによって私共は赦され、そのつとめに対する新しい力を支えられる。これは教会がその分離している有様に気づいて、神をその見出し得べきところに探し求めるならば教会の内に起ることはこの事なのである。教会の主要な任務はこのためにあるので、その礼拝、その説教とサクラメント、その交わりも、宣教の業も、牧会も、エキュメニカルな関係も、又その教育計画も、皆このためにあるのである。すなわちこれらの任務においても悉くこの事が一つの教育的な共同社会として、この奉仕を果たすために働いているのである。われわれは各個教会におけるわれわれの生活を通して公同教会を発見するのである。

討議のための問題

一、教会の教育の務めを発見するために教会の性格の問題から始めねばならぬ理由は何か？

二、教会を一つの共同体とし、教会員をその共同体における参加者として考えることからどんな教育観が考えられるか？

三、教会の教育的責任に関するわれわれの理解に加えられるもので、他に教会の性格についてどのような考え方があるか？

四、キリスト者共同体を教育の場とするこうした強調が学校や家庭におけるキリスト教教育についてわれわれの持つ見方に如何のように影響するであろうか？

五、今日の教会の分裂が各個教会の教育の業を妨げるものであろうか？

六、この研究の始めにしたエペソ人への手紙四・四——六の研究のうちに教会一致の基礎が見出し得るであろうか？

だ一人もない。もし、私たちがたがいに愛し合うなら、神は、私たちのうちにいまし、神の愛が私たちのうちに全うされるのである。」（Ｉヨハネ　四・一二）

この人と人との交わりは御霊を共有することであり、単なる人間同志の仲間といったような関係より深い程度のものである。これは教会のそのあるべき内容を備えている限り、教会のうちに見出されるものである。聖霊は見える教会の外で働かれることがある。従って御霊がどんなところに宿られていてもこれを見分けられることを心掛けなくてはならないが、自分たちの属する各個教会がいつも御霊にその扉を開いているようにすることは私たちのつとめである。

この交わりのうちにあって、又使徒の教えがある。私たちは「牧師として、又教師として」共同社会のうちにあるものたちの養育ということに関しての私たちの奉仕の業に対する責任から遠ざかっていることは出来ない。共同社会のうちにある生活の内容が新約聖書に描かれてあるようなものであることが、私共の教育的計画えの鍵であって、言は経験によって意味深いものとなり、教会は神の恵みが豊かにみなぎる雰囲気を備えるものである。

六、道

使　九・二
一九・二三
二四・二二

キリスト教は生活の形であって、早くから「道」（使　九・二）と呼ばれていた。それは決して一分派というものではないが、多くの問題を起した。街の銀細工人たちが、自分たちの造った偶像が売れなくなって商売が出来なくなった時に「この道について容易ならぬ騒動が起った」（使　一九・二三）と書いてある。私共はこの道がどこにゆくのか知る必要はない。それはわれわれがこの道を行くかぎり、われわれはすでに父に来ているからである。

この道は異教徒たちには不思議と思わせたが、それはクリスチャンたちが、その仲間同志、又非キリスト者に対しても愛するのを見たからであった。彼らは又クリスチャンたちが迫害に対して死に対して勇敢であり、その礼拝と行為とがいつも一致しているのを見たからであった。

しかし、この道の仲間の間では卑くもなさけない罪人たちに対して如何したものか議論が分れて、パウロはコリント人に対しては後日の教会がとったよりは寛大であった。寛容ということはテモテへの第二の手紙まで指示されていたが、間もなく大きな罪に対しては唯一度だけ赦すことが例となってしまった。この道はこれと完遂することには厳しくこれを求めたが、その他に及ぼす場合には広やかであった。

七、教会における教育

新約聖書における教会の描写は全く理想的なものであったが、それは決して全体の描写ではなかった。そこには罪があり、分裂があり、互いの交友を危くするような論争があったし、又道に従って歩むという生活の出来ないものもあった。教会は結局は、たとえ会衆は贖われた罪人であったにしても、罪人の集会以上のものではなかった。パウロが教会の一致を説いた、その多くは、すでに分裂のきざしが見えていたという、そうした背景に対してせられたものが多かった。（Ｉコリ　一・一二―一三、ガラテヤ　二・一一―一四）

教会は啓示のできごとであった。そして神はイエス・キリストを通して新しい種類の共同社会を形成するために歴史の中に働き給う

唯一の力であり、またそれは贖う愛の力である。それは歴史の謎を説くほふられる子羊である。

主の大祭司としての祈りは聞かれる。すべてのものは一つとなって礼拝する（ヨハネ一七・二〇―二六）。そして聖なる都から光は世に輝き、その門は開き、「国々」は神がかれらに与えられたあらゆる特別な賜や宝物を携えて中に入って行く。生命の木に近づくことは自由で（創三・二二―二四）、その葉は「国々のいやしのため」のものである。これが完成である。

この栄光の都では、信仰者はすでに市民である。主は教会を日々の戦いの中で、その霊をもって支え、言葉と礼典をもって養われる。あらゆる時代の聖徒の救いとさんびの歌は、ヨハネがとらわれの中で聞くことを許された天上の儀式の一部である。

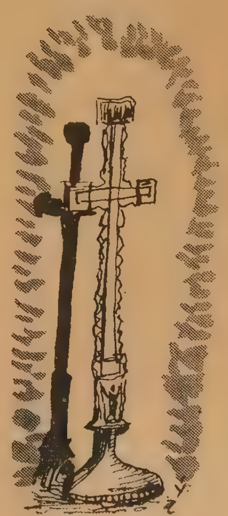
パレスチナでは、山の頂上に小さな村々がかたまっているのが見られる。それらは遠方から見えるので旅行者は見逃すことがない。イエスは「あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。」という表現をお用いになった。イエスは「あなたがたはあるべきだ」とか「あなたがたはありなさい」とか云われない。「あなたがたはある」と云われる。その光を輝かすことが、教会の本質である。イエスがおられるところに霊が働き、世が見るために光は輝く。（マタイ五・一―一二、ルカ一八・九―一四）

それゆえキリスト者は、キリストが闇の力に打ち勝たれたことを知っているので、キリストの光の中に立って物事をありのままに直視できる現実主義者である。光の中を歩くことはキリスト者が複雑な世相の中で物事や霊界をよく分別して生活することを示すものである。光が臨在することは、かれが罪の力にかかわらず新しい創造に属するという確信である。（ヨハネ一二・二〇―三六、コロサイ一・九―二〇）

光と闇とのきびしい対立を、われわれは真剣に考えなければならない。（Iヨハネ一・五）もしわれわれが、あの恐ろしい公共の広場であるゴルゴダを眺めるならば、そのもっともきびしい形式でこの対立を見ることができる。闇は神の臨在に対してわれわれの眼を閉ざすものである。それは、かれらに、そのあわれみある愛が不要であると考えさせる自己愛である。それは十字架を貧しく弱いとばかり見させる力と富に対する強いあこがれである。それは由緒正しい先祖や、お歴々の階級や、最強の国家や、もっとも神聖な宗教を代表し、それゆえに世を支配すべきであると考える人々の冷たさである。闇は最終が死であるという恐しさがある。この種類の闇は、われわれを取り囲み、われわれすべての中にあり、キリストの光を許容することができない。われわれが光を択ぶとき、この闇に反対する立場をとるのである。（イザヤ四九・一―七）

さてパウロのピリピ人への手紙を読んでみよう。この手紙は歓喜に満ちている。しかもこれが牢獄の中で書かれたことを思えば、なおさら感銘が深い。だが、たった一つの事が彼の喜びを妨げている。それはピリピ教会内の不和の報告である。（ピリピ二・一―一八参照）この章節は一致に対する熱情的な訴えで始まる（一―四節）。「わたしの喜びを満たしてほしい」につづいて、キリスト者にとって最高控訴裁判所というべきキリストの心（五）に移る。われわれがイエス・キリストにあって持っている心とは何であろうか。それは「虚栄」ではない（三）。キリストは「神と等しくあることを固守すべき事とは思われ」なかったが、これに対し、アダムは神のようになるよう誘われ（創三・五）、禁じられた果実を手にした。彼は自分のことを考えられなか

聖書の真理にてらす
今日の教会の問題



　全世界を通じてキリスト教はその歴史上になかった一大危機に直面している。過去一〇〇年間、伝統的根底の一つ一つが、もっとも徹底した批判の的となった。キリスト教は、かれらの基本的信仰に対し、ルネッサンスや宗教的改革時代以上に大きな挑戦を、やもうえず受けなければならないのである。東西両洋とも多数の人々は、近代人が宗教を全く時代おくれなものにしたと信じている。キリスト教信仰は時代遅れで不可解だと考える新しい世俗主義が発展した。神に対するどんなに真実な関心でも、筋違いだとして拒ける。ほとんどの人々は、こんな態度を一種の解放と考えている。ある人々は、自分たちの希望を科学につなぎ、他の人々は自分たちが人生の馬鹿らしさと呼ぶものを受け入れ、多くの人々は無意味と絶望で途方にくれている。

　われわれは、こんな状況の真中で生活し、それに対して無力であるが、それでもキリストは世の光であると繰返していう。キリストは、われわれに神の真の性質や、人間の真の性質と運命や、われわれが生活する世界のきびしい現実まで啓示される。これは何を意味するのであろうか。

光こそ教会の本質

　世界は神の被造物である。それは贖罪、愛の対照である。そして同時に、この愛が不断に拒否される場所である。（ヨハネ一・一―一八）キリストの中にある光は、教会の中にまた教会を通して輝く。これは、教会の会員である人々が、自分ではほとんど夢にも考えない力を持っていることをたしかに意味している。もしこれが本当でなければ、教会の任務について語ることは、それに反対する力があまりに大きいので馬鹿らしいと思うに違いない。

　神は、教会を通してその事業を継続されるのであるから、それは事実上福音の一部なのである。神はわれわれを用いることに定め、われわれを闇からその不思議な光へと移された。それはキリストだけがなしえたものである。かれは闇を征服し、同じことを行なうようにとわれわれを択ばれたのである。（黙二一・一―五、二一・二二〜二二・五、マタイ五・一四―一六）

　十字架は、この世のあらゆる力に打ち勝つ

る。それはそのとおりである。この文化の科学的、技術的な物の考え方にこりかたまっている人々の心は聖書のメッセージを受け入れられないように形成される。すなわちここにくいちがいが生じているのであって、この橋渡しをすることは、現代の教会のもっともさし迫った任務の一つである。しかもたとえこれが真実であっても、近代史や近代生活上の諸運動が聖書に非常に近くまでわれわれを導くことも真実である。

迫害や戦争を通して、または計画的に強引に神を拒否することを通して、または現代の社会的、科学的革命を通して、人々はこの人生がどのような意味をもつものであるかの問題から逃れることは出来ずに、改めて直面しなければならないのである。

私たちの教会の使命

これが真実であれば、聖書が語りかけるのは、こういった霊性上の究極的状況に対してであるから、敵対的と見える世は、実際的には聖書に近い。それ故、どんな状況の中にあっても、その周囲の世に入って行くのが教会の使命である。

事実上もはや数多く新旧の方法で働く力と更新や聖霊のしるしがある。われわれの中の多数は、現在よりもっとそれについて知るべきである。これらは、その中の若干である。聖書の再発見、一致への運動、伝道、力の更新、礼拝と儀式が持つ意義の深さの回復、教会の生活や目的、信徒の地位についての覚醒、そういった更新の証拠は、彼らが人々の苦難と結びついて教会が真の姿を取るとき最高調に達する。それらすべての動機は、キリストにおける神の愛、つまりどこにいてもわれわれを通して輝くその光である。たとえば産業に対する新しい形式の宣教や新しい形式の奉仕は、みんなある人々が多数のキリスト者以上に産業界の隣人を心にかけながら始まったものなのである。もう一つの実例として、キリスト者がアジア・アフリカの貧しい村々に医療や教育に出かけた場合も同じである。キリストの光は、選び出された罪人があまりにも多数で、かれらは今日でも忠実でなく、その光の中を歩くことを喜ばないので、現在充分に効果的に輝くことができない。キリストは私のために苦しまれたが、その光の中を歩くことも苦難を意味する。キリストは現在でも人々が苦しむところで苦しまれる。またわれわれは、その苦難に参加するよう召命を受ける。至上へのまぼろしに対するあからさまな怠りと不従順は、いつでもそうであったように、現在でも光の大敵であるイザヤ九・一―七、ルカ四・一四―三〇）。

この教会生活の更新期において一つの光であるキリストの中にある神に対する決意の意味や、闇と苦難の世における使命について、また、どんな近代世界における大問題がキリスト教的生活や良心に差し迫った矛盾を提出するかについても考えさせられる。われわれが生活する世界の完全な分析としてではなく人生に深刻な影響を与える現場の要求として三つの点をとりあげる。

第一は、全世界にわたる科学と技術の急速な発展や拡大と、それらが大きな祝福をもたらすと同時に偽りし礼拝を要求する事実である。それらは健康や福祉や基本的人権の達成のために莫大な利益を提供する。それらは正義の戦いの武器である。それらは、地上に生めよふえよという神の命令の部分的成就であることはたしかである。とはいえそれらは世間に広く行きわたった破壊的偶像礼拝の機会である。科学や技術の利益があまり大きいので、人々は人生問題が科学の進歩によって解決するといって科学的過程そのものを礼拝する。

人々は財産を欲し、現代の技術は、さまざ

った(四)。かれは『おのれをむなしうして僕のかたちを』とらえた(七)。キリストは『自己中心』でなく(三)おのれを低くして、『死に至るまで従順で』あられた(七)。それゆえかれは『高く引き上げられ』たが、それはあらゆる舌が『イエス・キリストは主である』と告白するためである(一)。これは、パウロ時代の教会が使用した讃美と礼拝の聖歌(六—一一)である。それは神が何であり、また人間が何であり、何であるべきかを啓示する。それは教会とその宣教についてのパウロの考え方を支配した。

悪魔は利口で、あらゆる闇の形式を光と見させる。われわれは、これらの闇の形式がどの範囲まで自分の生活や教会の中に存在するかを見るために、自分自身を検討しなければならない。われわれの一致に関する討議が、キリストの中に見た光にふさわしいものであるかどうかを自分自身に尋ねなければならない。それらについては潜在意識としての自己愛や怠りや漫心さえあるのではなかろうか。われわれの信仰は、われわれが何かあまり呑気に腰をおろしたり、何かわれわれに心の平和や国家や収入の安定を与えるので望ましいものであったり、何かわれわれを敵と和解するかわりに守護するものであったりするであろうか(イザヤ書五八・二、Ⅱコリント四・一—六、五・一四—二一)。

愛の要求

キリストは、そんな自己ぎまんや、闇を、その絶対的主張をもって刺しとおされる。この主張は、多くのイデオロギーや、「主義」や多くの宗教が人々の心を捉えようとして競う現代世界において、とくに重要である。キリストはこれらの上にお立ちになる。ある信徒たちに対するキリスト者の態度は、注目と尊敬のそれであるが、キリストは他の神々や忠誠の対象が、その下に立って奉仕しないかぎり、他と混同されてはならない。これは、われわれが「世界的宗教」の多くの成分の一つとして、かれを提示することができないことを意味する。それは、われわれが「一つの信仰は他のそれと同じ位によい」といえないことを意味する。それはキリストが西洋文明であろうとヨーロッパ文化であろうとアメリカ主義であろうと、あらゆる偽りの、または部分的な主張の上に立たれることと、われわれが重んじるこれらのものを支持する地方神として彼を利用できないことを意味する。

イエスの絶対的主張は、世界の一部をなしまたイエスを信じない人々に対する愛を要求する。われわれが、自分たち相互や他の人々に対し過去に不寛容であったことに多くのキリスト者は気ずいており、現在は、よりもっと気ずくべきであろう。キリストの愛は、もっとも奥深い問題についてさえ、われわれと同意しない人々を、われわれが対人関係で一そう充分な理解をもって取扱うことを要求している。さらにキリストに対する忠誠心は、自分の安全を計ろうとして世から身を引くことを許さない。世から離れて、教会という小さな社会に退いたとて安全性はない。たとえそれが危険きわまりないものであり大いなる冒険であることがわかっていても、世に出て行き、キリストというわれわれの光を、人々の前に輝やかすことにだけ人生を見出すべきである。われわれの一致はキリストとしっかり結びついて世のためにあるべきである。

とはいえ、われわれは世があまり敵対的であるので、しりごみするかもしれない。それはいつもそうであった。「彼は自分のところに来たのに、自分の民は彼を受け入れなかった」。しかも現代的産業化された世界、とくに西欧のそれは聖書の世界から特別に違っていて、われわれが聖書的信仰を理解することは困難であると至極もっともな議論がなされ

一致とは

各個教会

私たちの教会には、立派な交りがあるとだれかが云うとき、それはどういう意味なのであろうか。教会は立身出世して楽しい生活をする同じような精神状態の人々のクラブか、仲間にすぎないのであろうか。だれかが「教会へ行っても話かけてくれない」と言う時、それは、その会衆の中でキリスト者が「自分たちの仲間でない」人々を歓迎する気持ちがなく、教会は神が非常に異った人々から創造された交りと考えないことを意味するであろうか。もしだれかが「教会は党派争いでいっぱいだ」また個々には、「教会員はいつでも争っている」と云っているとしたら、それは、異った種類の人々が、たびたび非常に困難な交りの中で一緒に生活することを学んでいることなのであろうか。それとも、それはその相違を和解させるために、何の努力も払われていないことなのであろうか。キリスト者が、だれか他人について「あれは、私たちの仲間でない」というとき、それは教会の内か外に、世話をやく必要のない人がいるということであろうか。

これらは、人々が毎日のように語ることがらである。それはキリスト者の福音に対する誤解や不従順から来る不一致の原因へと導いている。それは、われわれが説く福音を、われわれの教会生活が、どういうふうに拒否するかを示すのである。——私たちの社会に分離し、競争し、敵対する教派が存在することとは別としても。

キリストにおける和解

「神は、キリストにおいて世をご自身に和解させ、その罪の責任を、これに負わせることをしないで、わたしたちに和解の福音をゆだねられたのである」（コリント五・一九）

世は神から離れ、互いに分れ争っている。キリストは、その分離した罪人を呼び集め、その体の肢として神と相互を一体にするため世にきて生命を捨てられた。私たちはキリストと和解した。私たちはおたがいに和解し、かれは私たちに「和解のメッセージ」を委ねられた。これらはみんな一つの真理の一部である。教会は和解の使者となり、自分で選ぶことが出来た友人でなく、神がお与えになった兄弟と仲よく生活することを学ぶ交りとなるために世につかわされたのである。

しかし私たちは世の不一致が教会を分離することを許した。分離した教会それ自体が、一致していた人々の間に新しい分離を導き入れたことがたびたびである。教会は和解の福音を宣伝しながら、偽りの行動をする。多数の男女が一つの交りを構成するので、教会は自分で説くところを生活していると世が理解できるよう私たちは悔改め、自分たちの生活の中で和解し教会生活を再組織することを求



まなもので無限に供給して所有熱を満足させる。人々は将来の見通しに目がくらみ、全過程のとりことなり、「もっと多く、もっとよく」という宗教に身を委ねる。

その結果は、時に宗教の姿を借りた世俗的唯物主義である。キリスト教国土に成長した教育、心理学、社会科学などの領域における近代的発達は、今日では自足的となり、その根元を忘れる傾向がある。その結果に対しては、どの一つの団体にも責任がないし、中でも科学者には責任がもっとも少いであろう。われわれは万人を盲目とする闇の現代版、中世の深刻なあいまいさには妨げられる。その矛盾のきびしさは、技術的に未開発な多数の国々の態度にあらわれている。かれらは高度に開発された国々を指して、「あんな唯物主義は望まない」という。しかもかれらは、正義と人権の名のもとに最高度の技術的手段を通して、できるだけ急速に自国の生産力増強に乗りだしもする。その矛盾は、現代人が直面する多数の矛盾の一例である。こうした矛盾の中で、キリスト教は、どのような助けを聖書的真理の知識から与えることができるであろうか。

第二に、近代世界において社会的変化は、自由と正義を獲得する手段として、また新しい専制と不正をもたらす過程としてあらわれる。これは真実であるが、現代の急転する社会は、自由と不自由、正義と不正義が同一変化の途上にあらわれるので、その矛盾をさし迫った問題とする。主要農業社会が急速な工業的発展をした場合には、伝統的価値され、人々は堕落し、道徳的規準が目茶苦茶となる都市を生み出す結果となる。急速な政治的独立は、指導者の地位とともに選挙民の巾広い諸問題を生み出す。物事は、もっと違った組織でなさるべきであるかか、工業化はゆっくりやるべきだとか云っても役に立たない。社会変化の速度にひきつづいて起る人間性の破壊はどうであろうか。この社会変化の速度を遅らせるべきだろうか。それとも現在正義を差し迫って必要とする問題は何であろうか。

第三に、現代史の中で一致と紛争が同時に成長する矛盾がある。現在の世界的場面には相互依存という意味の一致がある。しかしこの相互依存は、平和を生み出さなかった。人々は自らの安全のために小さく身を守る社会を形成する。キリスト者に何ができるであろうか。

諸教会は、神のメッセージを再発見し、生活を更新する時期である。何がなされなければならないであろうか。現代の大きくて複雑な諸問題に対し、解答をもつ持たないにかかわらず、証言する恩寵と力が与えられるのであるから、われわれは証しなければならない。それについて教会内で、もっと討議を奨励することが大切である。聖書は、われわれがまだ到達しない知恵を含んでいるので、その探究をつづけなければならない。とくにわれわれは、あらゆる努力をしなければならない――聖書の世界からあまりかけ離れて生活しているので――。

われわれは「教会」について語る。けれど本当の意味で、唯一の神聖な、公同的、使徒的教会があると信じなければ一致はあり得ない。キリストは十字架上で、また復活によってそれをされた。このことをできるだけはっきり表明しなければならない。各自、その教会について云いたいと思うことは違うが、これが存在することと、その中に他のどこにもない確信と目的を見出すことを承知している。それを行うのは、教会がわれわれでなく、主イエス・キリストに属することを信ずればこそである。

うではないか。

分離は主として宗教的、神学的でなく、社会的、経済的な理由の結果であるかもしれない。収入や教育、または人種や言語や文化の相違、賭け事や飲酒やダンスのような問題に関する意見の不一致などであり、さらに別の理由として、分離は、感情的な理由から来るかも知れない。特別な会衆や教会堂や牧師は執着をもって、慣れない礼拝の方法を好まないこと、変化する可能性を考えたがらないことなどがある。分離は、牧師や司祭の狭量からや、教会活動があまりに忙しく、関係者が外部の何事にも、何人にもかまっていられないことからくるかもしれない。近くの会衆はおたがいに何も知らなかったり、知っていると思うものは戯画かもしれなかったり、また他の教会について多少知っていても、背景が分らないために、まちがって、偏見や無慈悲におちいるかもしれなかったりするのである。

これと共に、不一致であることの宗教的、神学的理由がある。その中でもっとも明白なもののうちの若干をのべてみよう。

教会間に教育や礼拝の方法について違いがあること。ある教会は、すべてのキリスト者を自由に聖餐に歓迎し、またその会員が、信仰告白の違う教会で聖餐に与ることを許している。他の教会は良心的にそれができない。ある教会は同心者を求め、他のキリスト教会の会員の中に同信者を起そうとする。諸教会は異人種間の雑婚について異った歓迎をもつのである。

しかも、もっと基本的な信仰問題までが、私たちを分離させるし、一体どこに教会の権威の源泉があるだろうか。聖書だろうか、伝統であろうか、監督や大会であろうか、内的光明であろうか。聖書に対する違った態度があり、「歴史的監督制」に対する主張がある。こうして諸教会は、信仰箇条や、信仰告白文の重要性や、それらが教会生活の中で占める位置について意見がわかれるのである。

これらの相違を検討すると、それはかれらがキリスト教信仰全体を理解する方法を異にすることがわかるのである。

これら分離と不一致の原因のうち、どれがもっとも重要と見えるであろうか。それらはあなたがたや、あなたがたの会衆のうちのほとんどの人々にとっては身近な問題でもなければ非現実的な事柄なのであろうか、その中で、あなたがたは問題を解決する側であろうか、それとも問題となる側であろうか。

ともどもに前進する

あなたがたの会衆は、階級間の差別を取り除く手段をとっているであろうか。真実に全体を代表する会合があるだろうか。あなたがたの附近で違った教派の教会と一緒に何かしているであろうか。おたがいのために祈っているであろうか。教会どうしがおたがいに助けあうための統一行動や連合の戸別訪問や、世界教会的青少年事業や、連合の家庭集会、社会問題についての共同宣言など種々な形式の協同伝道をやっているだろうか。諸種の各個教会は相互の教会会議に代議員を送るほど友好的であろうか。またおたがいに礼拝をともにしているであろうか。

どうすれば、あなたがたの地域の教会は、祈禱と行動の上で教会の一致に参加することができるであろうか。それは、他の教会や諸教会の会議のために祈ることを通して、またはキリスト教的一致のための祈禱週間に参加することを通して、あるいは私たちの礼拝で他のキリスト教的伝統をもつ祈禱や聖歌を使用することを通して、さらには、世界の他の部分や他の信仰告白を持つ教会から訪問者を迎えることを通して、ではなかろうか。

さて、協力することを一ばんしりごみする

められている。教会の分離は、その本性に反し、その証をゆがめ、その使命を破っているのである。

「現に見ている兄弟を愛さないものは、目に見えない神を愛することはできない」(Ⅰヨハネ四・二〇)とあるように、もしも私たちが、おたがいに反目しつづけるのならば、自分たちは神と正しい関係にあると主張できるだろうか。「まず行って、その兄弟と和解しそれから帰って来て供物をささげることにしなさい」(マタイ五・二四)。パウロが、コリント教会内に、党派心と争いがあることを聞くとき、その答は「キリストは、いくつにも分けられたものか」であった。(Ⅰコリント一・一三)

一致は、牧師や神学者や教会指導者に限った問題ではないのである。教会のすべての会員に関係することを忘れてはならない。人体に多くの部分があるように、キリストの体が正しく機能を働かすためには、全会員が必要であると、パウロは同じコリントの教会に語っている。さて、そこでもし私たちが聖書の直理に忠実であるならば、不一致が問題にならないのはどうしたわけであろう。

なぜ、それほど多くのキリスト者が分離と不一致をそのままにして平気でいられるのであろうか。

恐れと希望

会衆や教会が、一致について考えはじめると、諸種の恐れや希望がその心中に思い浮んで来る。そのうちのあるものは間違っていて値打ちがなく美しいとも思われない。キリスト者は、一致が自分の教会の権力や資格の最後を意味すると思い、そのことを心配したりそれを恐るべきではない。また同時に自分の教会が社会でもっと世俗的権力を振ることを期待して、一致への希望を待つべきものではないのである。(ピリピ二・一—一八)

一致の思想から来る若干の希望と恐れについて述べてみよう。

a　ある人々は、教育や組織や礼拝など、方法の画一化を恐れている。他の人々は、一致が、もっと総合的な統一の中に、豊富な種々相をもたらすことを希望する。

b　ある人々は、基本的真理が妥協されることを恐れている。他の人々は、一致によって私たちが一そう大きな真理の理解に導かれることを希望している。

c　ある人々は、一致が怠惰で、無気力な画一化を意味することを恐れている。他の人々は、違った体験を分ちあうことが更新をもたらすよう希望している。

d　ある人々は、全国的教会合同が、国家主義を強化することを恐れている。他の人々は、一致が国民生活の中で、もっとも忠実に召命をはたすと同時に、他国の教会と親しい関係を保つことを教会に可能にするよう希望している。

e　ある人々は、一致が中央団体の責任や、権力を増大することを恐れている。他の人々は、一致が教会の使命の忘れられた部分をはたす適当な手段となることを希望している。

f　ある人々は、部分的合同が、全体の合同を遅らせることを恐れている。他の人々はそんな一致が合同する教会に、これまでの教会以上に広く深いキリスト者生活を与えて、一そう広い一致への階級となることを希望している。

さて、あなたがたの確信はどこにあるだろうか。これらの希望と恐れのうち、どれが間違っており、美しいと思われないものであろうか。

現状における一致と不一致

あなたがたは、自分の教会、自分の教派、近くの教会の状況を考えて、なにがキリスト者間の分離の主要な原因であるか考えてみよ

中で充分その役割を演ずる機会が与えられているであろうか。教会の茶会を準備し、クリスマスやイースターや収穫感謝祭に教会を飾りつけ、もっとも近代的でもっとも収益の多い手芸品の販売を計画したことに対し、婦人たちに念入りの感謝決議をすることだけで答えられない問題である。教会や社会における婦人の地位と資格、また男子との協力におけるその役割は、当面すべきもっともさし迫った問題である。大体の社会では、結婚や仕事や社会的慣習の中で、婦人の地位に関するキリスト教の教訓が革新的であることをすぐ認める。しかし、この福音を宣伝し、この教義を教える教会では、その時代において、世俗の国家的社会的改革よりずっと遅れることがある。私たちは、男子や婦人が教会や社会の生活に充分参加するよう援助するために、何ができるであろうか。

一致への希望の理由

教会は、たえず理解し生活し解釈しようとしなければならない福音がゆだねられている。たとえば、近くのすべての教会が、みんな共同の目的と立てて集ろうと急に決定しても、もし彼らが真実の理解と深い悔い改めとこうしてこそはじめてキリストの召命に従うことができるという本当の自覚を伴う真実の和解をもって集るのでなければ、やがてもう一度分離するであろう。一致はただ集るよりずっとそれ以上のことを意味する。それは、キリストにあって私たちが与えられる一致を表明するのである。

諸教会は、キリストの教会の一致のために献身した指導者や学者を通して、この事実を認めた。共にあることに対する最初の感激から醒めて、幾世紀もの分離によってどんなにわざわいが起ったかを認めはじめた。諸教会はあんまり長い間話し合いをしなかったのでおたがいに話をしはじめたとき、同じ言葉を使いながら全く違ったことを意味していることがわかったほどである。かれらは、ある教会が伝承の権威を、ある教会が聖書の権威を力説することがわかった。これまでおたがいに遠方から偏見をもって眺め、教派的目隠しをして教会史を読んでいたことがわかった。分離していながら、聖霊が諸種の教派を導いて福音の真理の諸相を理解させられたことがわかった。かれらはまた、神学上の一致点に達したとき、全く違った方面から議論がでて和解完成途上の進歩を妨げることを発見したのである。すなわち国家的、人種的、制度的階級的利害関係が頭をあげはじめた。

一致に対する真剣なねがいは、「キリストと教会」「伝承」「礼拝の意義」に関する研究や、制度主義のような非神学的要素の影響を指摘したり評価したりすることである。それはすべて問題に対する答えを発見するためである。キリスト者にとって三位一体の名によってバプテスマを受け、それによって一体の肢となるとは何を意味するのであろうか。神は、いかなる方法をもって、キリストが祈られた一致をあらわすよう私たちを召しておられるのだろうか。考えなしに集ることは、分離に満足していることと同じようにわざわいである。

教会の礼拝で日曜ごとに私たちは信条や讃美や祈祷で、イエス・キリストは主であることを主張する。しかしそれは何を意味するのであろうか。多数の人々にとって、それは迫害と圧制を招くものであろう。イエス・キリストが主であるということはキリスト教的信仰と聖書的使信の中心である。聖書が、イエス・キリストは教会と世界の主であると主張するとき、何を意味するであろうか。

イエス・キリストは主であるというこのキリスト教的主張に対処する別の方法がある。このことは私たちの現在おかれているところから始めることができるものである。

研究と礼拝において一致と協力を追い求めることは、これらとこれら以外のあらゆる生

教会やキリスト者との関係を改善するためにどのようなことを行っているかを考えてほしい。

われらの求める一致

「神の意志であり、また教会に対する賜物である一致は、各地でイエス・キリストを告白するすべての人を一つの使徒的信仰に保ち一つの福音を説き、一つのパンをさき、万人に対する証と奉仕をもって共同生活を営み、み名による一つのバプテスマを通して、おたがいに全く信頼しあう交りに入ると共に、教職と教会員が一同に認められ、一同は神が教会にお命じになり、任務に応じて行動し発言できるよう、あらゆるところ、あらゆる時代のキリスト者全体の交りに結びつけるところのものである」とある世界教会協議会の宣言は、あなたがたの教派や信仰告白にどういう働きかけをしているだろうか。研究や討論をおこなってみた上で、どんな手を次に打つべきかを考えられただろうか。

宣教の地においては、分離された教会がさまざまに行う活動は混乱を来し、教会の存在を迷わせる。キリストの王国の前進は、分離によって宣教事業における証や戦術がないため妨げられていた。とりわけ分離した教会は異教世界に対して一人の主を真実に証できないことがわかったのである。

新世紀における新しい問題、産業関係、都市化、技術開発から起る問題、平和と戦争の問題に当面して一致が欠けているため問題があった。

こうした具体的問題と教会への挑戦の声が私共を反省させ、正しくキリストを見つめることをさせ、そのことによって一致について考えさせられたのである。

交わりの建設

教会からティーンエイジャーが脱落する悲劇は、一つの教会や教団の問題ではない。それは全教会の問題である。青少年の指導者がその問題と体験についての知識をわかちあうために集るときこそ、青少年が教会の意義深い会員になれる新しい方法を発見し始めることができるのである。と同時に現代の軽率な青少年に近づくおたがいの方法を学ぶことができるのである。

しかしこれ以上に必要なことは、青少年自身が、かれらの住む地域内で、または世界的交りに入って、その教会や国家の境界を越えて一つにせられなければならないのである。

信徒についてはどうであろうか。各教会員は商工業界と職域で個人的に信仰生活を保ちキリスト教的規準を掲げることができるが、その信仰や規準に挑戦する制度や手続きで妨害を受けることを知っている。またかれらは大衆の間に教権に対する反感が強く、もし福音が伝えられるのなら、男女の信徒が、生活と職業の場で伝えなければならないことを知っている。信徒の地位と証についての理解全体に革命が起っている。かれらは、事務所や工場や農村や鉱山における日常の仕事を、キリストの体の働きの一部として見ている。これは教職と競争する信徒の問題でなく、自分自身であるままにキリストに従う自分自身が信徒のそれである。

もう一つ、一致について鋭く立入った質問をした声が男子の声であると定めてかかってはならない。それが婦人の声であったことは同じように当然なことである。教会や社会のどちらであっても、男女がたがいに協力することは当然のことと考えられるであろう。婦人の資格について、わざわざ問題を提出する人々は、偏屈で口論好きの女性主義者とみなされかも知れない。だが教会間の婦人に対する伝統型の奉仕は適当であろうか。婦人団体の機構やプログラムは、ほんとうに満足なものであろうか。婦人たちは教会全体の働きの

児童説教

一一月のこよみ

一一月のこよみ

いよいよ教会暦の最後の月になった。一般暦の一二月が反省の時であり、新しい希望を待望する時であるように、教会暦の一一月は一年間の最後のしめくくりの時であり、その終りは、来るべきキリストの降臨を期待する時でもある。したがって、日課も終末に関係のあることがらを取扱っていると思うが、それは一二月になって来るべき主を迎える意味と関連を持てっいる。

一一月一日は全聖徒の日 (All Saints Day) で、天上の教会になる召された信者を覚える時である。この日か、その次の日曜日かに、なくなった教師や生徒たちがあれば、その人々の紀念会をしたり、お墓に行ったりするのも、よいことであろう。季節的に言っても、これは野外に出る最良の時期である。

感謝祭は、アメリカ等では、一一月の最後の木曜日がそれで、神のめぐみ、特に収穫の感謝をする。今年は二三日の木曜が、勤労感謝の日になっている。この日か、その次の日かを、感謝祭として、特別の礼拝を工夫してみたらどうであろうか。

感謝祭がすむと、すぐにクリスマスの季節感が湧いてくるが、それからクリスマスの仕度をしたのでは遅すぎよう。一一月になったら、すぐにクリスマスのための準備会を開いて、クリスマスの行事の打ち合せをしておいた方が賢明である。



一一月五日

国への義務・神への義務

聖書 カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい。　マタイ　二二・二一

皆さんのお父さま、お兄さんやお姉さま、その外おとなの人で働いている人は、皆いろいろの形で税金を納めています。会社に勤めている人も、商売をしている人も、農業をしている人も。どこの国の人でも皆税金を納める義務を与えられているからです。この税金によって国（都・道・府・県・市・町・村）は国民のために、いろいろ大切な政治をします。国民は、従って、国民として大きな誇りをもってこの納税の義務を果さねばならないのです。

このことは誰でもよく知っていますが、それでいてもっと大切なのは人間として当然果さねばならない一番大事な義務のことになると、それを忘れている人が、世の中には大変多いのです。人間として「最も大切な義務」と言うのは、創造主である天の父なる神への義務です。

ある日、イエスのところへパリサイ人の弟子たちとヘロデ党の人たちがやって来ました。彼らは、イエスをやり込めようと悪だくみをして来たのです。「イエスさま、あなたはいつも真実を教えて下さる。そこで、カイザルに税金を納めてよいか、いけないか、教えて下さい」この質問はユダヤ人にとっては重大な問題でした。答のしようによっては大きな波乱を起します。しかし、どんな場合でも真実は語られねばならない。しかも、真実を語るには勇気がいります。イエスは、彼らに持っているデナリ貨幣を見させ、そこに刻ま

活の側面における本当の教会の更新が伴わなければなし得ないことなのである。そして誰れでも、教育と研究をもって諸教会に奉仕することが、キリストの光を輝かせる本当の意味の行動であることを認めるであろう。

「聖書の真理にてらす今日の教会の問題」と「一致とは」は、一一月一八日から一二月六日までニューデリーで開かれる世界教会協議会の研究課題を抜粋したものです。（編集部）

一致に関する青年の主張

——NCC青年協議会の声より——

教会と世界の対立、あるいは教派間の一致の問題、世界の具体的な姿としての日本、または具体例として周囲の社会と教会の理解、教会自身についての反省、さらに神学的に教会とは何か、また Institution としての教会の伝統的な姿、教会の内的一致などだけでなく、個々の問題を解くことについて考えられなければならない。個々の表現は異っても信仰の一致はあると考えるべきだろうか。もしそうとすれば、一体信仰の一致とは何であろうか。日本人は意見の異るものを排撃する気分があるが、そうした欠点を反省して諸々の要素を含んで一つになって行く事を教会において考えなければならないのではないか。要するに、社会の痛みが教会の交りの中で十分に考えられなければならないと云う事であって、それはどのようにして自らが謙虚になって他に聞くか、僕としてのキリストに目を向けるかという事なのである。

現在の教会の分離を「悪である」「いたしかたない悪である」「必然的な結果である」とする三つの考え方がある。戦後に日本基督教団から、聖公会、ルーテル教会、バプテスト教会、新日基教会が離脱したのは、一体なぜであったかという点は大いに考える必要があると思う。経済的理由か？教義的理由か？自教派教勢の理由か？

しかしキリスト者であり、神の子であるということに一致の第一点をおかないのではないだろうか。教理的理解がなければ、どうしても一致はだめなのであろうか。欧米のように教会の長い歴史と伝統をもっていない日本の教会の現実においては、「教派」は無意味ではなかろうか。無理矢理に教派を主張することは、自己温存か、外国かいらいの教会となってしまって、日本の教会でなくなり、大衆から浮き上ってしまってはいないか。

「神の子らの群たる教会」という一致した理解があるとすれば、その上で教理的な問題が論じられてはどうなのであろうか。教会とは何か、という点で求められるべきで、制度すなわち固定した型の間で争われてはならない。各教派があることは、家族員の多様性のようなものであるが、キリストにあって一体となり神の家族としてあらねばならないのではないだろうか。牧師間の問題はあろうが、われわれ青年は一致への歩みを踏み出さなければならない。一致の実現のために長い間、謙虚に、語りあいたいものである。分離の種々相を知ることである。そこには、多くの非神学的要素があり感情的問題もある。一致の目標を現NCC内の教会間にのみとどめずにNCC未加盟の教会をも含めて考えられたい。

かを知りました。「イエスに頼ることを知らなかったからだ。死んだヤイロの娘さえ生きかえらせる力のある方は、きっとこの私を助けてくださる」そう思うともう矢もたてもたまらず教会に向って馳け出しました。さっきとはまるで違って希望に輝き、力強く……。

　けさの聖言をもう一度読んでみましょう。めあてのない歩み、イエスさまに頼ることを知らない人々の姿、それが罪なのです。この人はそこから助け出されました。御子によって、死人をさえ甦えらせる御力によって救われたのです。それはヤイロのようにこの人も信じてイエスさまに頼ったからです。（そのためにたった一枚の紙片はなくてはならないものでした。私たちにとって一枚の紙片とは何でしょう。そっと肩を叩いてけさも聖霊は私たちにそれをわたしてくださいました）さあもう一度けさの聖言を読んでみましょう。そして私たちもそのような救いをいただけるように祈りましょう。

（聖言を読み祈る）

註1　①②を一枚の模造紙に書いて提示しつつ読むかフランネルを用いて一句ずす提示しながら読むようにする

2　③ではけさの聖句を同様の方法で示しつつ読むようにする

3　冒頭の例話はより適切なものを取り上げてくださることが望ましいと思います

松山　幸生

―一月一九日―

いつまでも、主とともに

聖書　**わたしたちが信じているように、イエスが死んで復活されたからには、同様に神はイエスにあって眠っている人々をも、イエスと一緒に導き出して下さるであろう。**　Iテサ・一四

私たちの一生のうちには、多くの苦しいこともありますが、また楽しいことだって沢山あります。このようなことをくりかえしながら、人はみな、いつか必らず死に出会うのです。死は、生きている間の喜びも、悲しみも、何もかも奪い取ってしまいます。皆さんたちは、「死んだらどうなるだろうか」と、考えたことはありませんか。死んだら、何もかもおしまいなのだと思いますか。それでは人間として、あまりにもみじめだと思いませんか。

　イエスさまは「わたしは甦りであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じるものは、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」（ヨハネ一一・二五―二六）と言われました。なんと慰めと望みに満ちたお言葉でしょう。

　イエスさまこそ救い主であると信じて、いつもイエスさまの命をいただきながら生きている人は、死ぬことも生きることも、すべてイエスさまと一緒なのです（ロマ一四・八）。わたしたちは、イエスさまが、罪と死の中に閉じこめられないで、お甦りになったことを知っていますね。それなら、信じてイエスさまにつながっている私たちも、同じようにイエスさまと一緒に甦えることができるはずです。頭であるイエスさまが甦られたからには、それにくっついている胴体や手足である私たちもまた、一緒に甦って、永遠に生きるものとなるのです。これこそ、イエスさまを信じて生きているものの最も大きい慰めと望みなのです。だからこそ、イエスさまを信じている人は、此の世の中で、すべての困難にも打ち勝ち、神さまのみこころに従って精一杯仕事に励むこともできるのです。

　わたしたちは、いつも主の祈りの中で、「御国をきたらせ給え」と祈っています。わたしたちは、イエスさまによって望んでいることがらを、まだ実際には見ていないけれども、確く信じて祈っているのです（ヘブル一一・一）。それは、イエスさまが、「祈るとき

れている肖像は誰かと尋ねられました。彼らは「カイザルのです」と答えた。イエスは、即座に「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」ときっぱり教えられたのです。

「カイザルのものはカイザルに」国民は、その国に税金を納めることは当然の義務です。しかし、それだけで私たちの義務のすべてが終ったのではありません。「神のものは神に返しなさい」私たちが人間として考える時、もっと大切な義務があることがわかります。人間は「天地の造り主・全能の父なる神」によって、神の像（かたち）に創造られました。私たちのうちには「神の像（かたち）」が刻まれています。さらにキリスト者は洗礼の時、その額に十字架のしるしがしるされ、又聖霊の証印を受けています。このような尊いかたちをやどし、はっきりしたしるしをしるされている私たち人間は、そのしるしのついている私たち自身を神にお献げしなければなりません。これは当然のことです。

「神よ、私自身をみ前に献げます。どうぞみこころのままにお用い下さい」と常に祈る時、神は私たちを、神の御用、人々への奉仕のわざにお用い下さいます。私たちのような小さい者が、神の尊い御用のお役に立つ、これほどの光栄・よろこびが他にあるでしょうか。

久保淵豊彦

―― 一月一二日 ――

イエスさまに頼ろう

聖書　**わたしたちは、この御子によってあがない、すなわち、罪のゆるしを受けているのである。**　**コロサイ　一・一四**

木枯らしが吹く寒い夜、とぼとぼと力なく一人の人が歩いていました。仕事に失敗し、何とかしようとあちこちからお金を借りて努力してみましたが、やっぱりだめだったのです。「これから先どうして行ったらよいだろう」そう思うだけでも心の中が暗くなり、寒い風が心の中を吹きまくるのでした。そのうえ借金を返す約束の日も迫って来ます。「ああ！もうだめだ。何もかもみんなだめになってしまった」深いため息をつくとまた背中をまるめて、めあてもなくとぼとぼと歩き出しました。

その時です。誰かが肩を叩いて一枚の紙片をわたしてくれました。「どんなときにもイエスに頼れ。苦しい時も、悩みの時も、淋しい時も、疲れた時も、病める時にも、死ぬ時さえも」「死ぬ時——そんなバカな！死んでしまえばおしまいさ」——そうでしょうか。ほんとうに死んでしまえばおしまいなのでしょうか。

紙片の文章は続いています。「イエスはあなたを待っている」「そんなバカな」と云ってはみたが彼は今生きている。悩んでいる。そして苦しんでいるのです。この言葉に励まされ、彼はその先を読み続けました。そこにはマタイ九・一八～二六のできごとが書かれていました。私たちも聖書を開いて読んでみましょう。一三頁です。（ゆっくり内容を味合いながら、みんなで読むことが望ましい——かいつまんでこのできごとを語ってきかせてもよい）

読み終った時、彼は考えました。「この人は自分の娘が死んだ時何を考え、何をしただろう」「何もかもみんなだめになってしまったのに、この人には希望がある。これは一体なぜだろう」と。みなさんは知っていますね。それはヤイロが人の生命は旧約の創世紀二・七にあるように、神さまがくださったことを信じ、生命を与えてくださった方だけが、私たちの生命を自由に支配なさることができるのだという信仰をもっていたからですね。

こうしてこの人は、なぜ自分が苦しみ悩み、希望がもてなかった

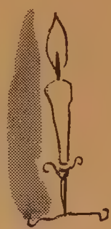
礼拝説教



三位一体後第二三主日

地上の権力をもつ者との関係

十一月五日



主日の趣旨　本主日の主題は天上と地上と二重の国籍をもつキリスト者が、地上にあっていかに生きるべきかという問題である。普通、三位一体節は二四主日位で終りを告げるので、本主日の主題は、もう降臨節を迎える準備の含みがある。すなわち終末の問題を考えるための予備的な主題である。

主題　天に属する者

福音書　マタイ　二二・一五—二二
使徒書　ピリピ　三・一七—二一
旧　約　ダニエル　四・二九—三九

祈り　信仰のもとにして我らの避け所、我らの力なる神よ、願わくは、主の公会の祈りを聞こし召し、その信じて願うところを得させたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。　アーメン

説教

聖パウロは、本日の使徒書の中で「わたしたちの国籍は天にある」といっている。キリスト者は天に国籍を有する者である、というのである。もちろんこのことは彼が地上の国籍を無視したことを意味しない。彼は一人の市民、一人の国民として、もっとも熱烈な愛国者であり、本当の意味において憂国の士であった。「わたしの兄弟、肉による同族のためなら、わたしのこの身が呪われて、キリストから離されてもいとわない」（ロマ九・三）というのが彼の真情であった。

しかも彼は心霊的な意味において「わたしたちの国籍は天にある」と言うのである。

モファット教授はこの部分を「我らは天の殖民である」と意訳している。ピリピ人はロマの殖民地であることに誇りを感じていたので、パウロは「君たちはロマの植民ではなくて、天よりの殖民なのだ、もっと大きな誇りを持ちなさい」と言っているのであろう。

我らにはそれぞれに故郷があり地上の国籍がある、しかし霊的にはわれらは本来天に属する者であって現実の地上の生活は言わば植民地の生活なのである。ペテロが「あなた方は、この世の旅人であり寄留者である」といっているのも同じ意味である。（ペテロ第一二・一一）

しからば天に国籍を有する我らは地上においてどのように生きる

にはこう祈りなさい」（ルカ一一・二）と言って、与えて下さった祈りだから、必らずその通りになると信じて祈るのです。

イエスさまを信じて今生きているわたしたちも、イエスさまを信じ続けて死んでいった人たちも、みんな何時か必らず、神さまの栄光に輝くイエスさまをお迎えして、いつまでもいつまでもイエスさまと一緒に居るようになるのです。「わたしは甦りであり、命である」と言われたイエスさまは、「しかり、わたしはすぐに来る」（黙示二二・二〇）と約束して下さいました。このすばらしいお約束にこたえて、わたしたちは「アーメン、主イエスよ、きたりませ」と、いつも祈りながら待ち続けるものになりましょう。

江藤　安純

—— 一一月二六日 ——

ほんとうの備え

聖書　目をさましていなさい。その日その時が、あなたがたにはわからないからである。

マタイ　二五・一一―一三

秋も終りに近づいて、野や山が紅葉しはじめる頃に、戸外に出ていろんな昆虫の生態を観察したことがありますか。かまきり、ばった、こおろぎはよぼよぼと、いかにもひもじそうに食物をあさって地面をはい廻っているのに、蟻は一生懸命に冬籠りの準備よろしく餌物を自分の巣の中へ引き込んで行くのをよく見るでしょう。蟻は暑い夏のさかりも一刻の休みなく、せっせと働いて冬の準備をして厳しい冬の期間を迎えます。しかし、ほかの虫たちは、呑気にまた楽しそうに、メロデーを奏でてのびのびと平和に夏をおくります。さあ、一体、冬が来たらどうなるでしょうか。もちろん、冬の食物の貯えも十分だし、どんな深い雪が降っても蟻は冬を越すでしょう。しかし、ほかの虫たちは木枯しに吹かれて、飢えと寒さで全部死んでしまうでしょう。自然の世界――虫たちの世界にも、生きて行くことのきびしさが、その原則が教えられております。

十人のおとめの物語りに出てきます私たちへの教訓は、イエスさまに対する心の持ち方を、ごく平易に、また具体的に教えているものです。招待を受けて、宴会に出ようとする人が、何んの心の準備も用意もしてないとき、急に宴会に出席する友が誘いに来て用意をしていなかったといって、後から出ようとしても、宴会の席は閉じられて、出席できないというのです。宴会の招待を受けた五人のおとめは、いざというときの準備を不断にして、用意して待っていたので楽しい宴会に出席できたというのです。

イエスさまは、約束された時には必らず私たちのところに見えるのです。しかし、何時、この世界にお見えになるかは、私たちには測り知ることの出来ないことなのです。ですから、不断に、何時、イエスさまがこられても良いような心の備えを、用意をしておかねばならないのです。もし準備がおくれていたり、準備をせずにのんびりしていたら、せっかくのイエスさまからご招待を受けていながら、閉め出されて、楽しげな宴会のざわめきを窓ごしに眺めて立ち去らねばならないでしょう。虫たちと同じように、みにくいむくろをさらすようになります。いざというこの時に用意がないばっかりに全てに失格するわけです。

私たちの心の本当の準備、それはなにも特別なことではありません。毎日曜日に教会学校に来て、神さまを礼拝し、イエスさまのお話を聞くこと、また自分一人でよく聖書のお勉強をすること、この一つ一つが不断の準備なのです。「ローマは一日にしてならず」ということを知っているでしょう。こつこつと蟻のような準備が私たちに本当にほしいものです。

酒井　哲雄

主題　必死の信仰

福音書　マタイ　九・一八―二六
使徒書　コロサイ　一・九―一四
旧　約　詩篇　三九・四―一三

祈り　主よ、大いなるあわれみをもって御民のとがを赦し、その弱きによりて犯せる罪のなわめを解きたまわんことを、救い主イエス・キリストのいさをによりてこいねがい奉る。　アーメン

説　教

主イエスがガダラ人の地から再びカペナウムに帰られ、取税人マタイを使徒としてお召しになって間もなくのことであった。

会堂司（マルコ伝によればヤイロと言う者）がやって来て「私の娘が、ただ今死にました。しかし主がおいで下さって手を置いて下されば必ず娘は生きかえります」と主イエスに懇願した。主は娘を愛する会堂司の必死の願いと、主イエスに対する絶対の信頼を御覧になって彼について会堂司の家に急がれた。

その途上のできごとである。一二年間血漏症を患い、多くの医者に苦しめられ、医療費のために財産を使い果し、しかも何の効もなく病勢は悪化するばかりだという、哀れな一人の女（マルコ五・二五―三四）が人波をかきわけて主イエスに近づき「み衣に触りさえすれば必ず癒して頂ける」と確く信じて主のみ衣のふさに触った。

それは人知れず秘かに行われた行為であった。しかし主イエスの前には、すべての事はあらわであった。良きも悪しきも、隠れて行うことはあり得ないのである。

しかもこの女の行為は必死の信仰の行為であった。頼るべき医者には却て苦しめられ、財産は使い果し、病勢は募るばかりであった。あまつさえ、不浄の病であって苦悩を分つ友も、しるべも彼女のもとを離れて行った。今は、天涯孤独、語る友もなく、頼るべき何ものもなかった。

折も折、主イエスが今、現に眼の前を通りすぎ給うのである。千歳一遇と言わんか、この時を措いて又となき只一度の機会である。この女が群集をかきわけて主に近づいて行った必死の様相が眼のあたり見えるようである。

しかも、不浄の身をもって主に近づいて行く事が、いかに恐れ多いことであるか、この女自身が知りつくしていた。

救われんと願う切実な願いは、この女の心をかりたてて主に近ずかしめたが、不浄の身をもって聖なる主に近ずくことの恐懼は、女のはやる心を制止した。……そしてその結果は、み衣のふさに触ると言う秘かな行為となってあらわれたのであった。

絶体絶命の状態に置かれた哀れな女が最後の望みをかけて救いを求める懸命の霊魂の叫びを主イエスが聞きのがされるはずはない。

「娘よ、しっかりしなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです」

ここに（娘よ）と訳してあることばは「娘さん」と言うようなよそよそしい呼びかけではない。むしろ（わが子よ）とか（わが娘）といったような親愛にみちた呼びかけである。

主イエスから愛情のこもったお声で「わが子よ」と呼ばれた瞬間、この女は既に天にも昇る心地であったであろう。

それは、もう久しい間、恐らくこの女が母の懐を離れて以来、聴

べきであろうか。

主イエスは天国のことを「わが父の家」と仰せられている。「わが父の家」とは「父なる神が支配して居られるところ」の意である。ところが地上はどうであろうか「十字架に敵対して歩いている者が多く、彼らの神はその腹、彼らの栄光はその恥、彼らの思いは地上のことでみたされている、彼らの最後は滅びである」とパウロの語っている通りである。

「われらいざ飲食せん、明日死ぬべければなり」神を離れた人間には、未来への希望はない、あるものは今日、現在の瞬間だけである。神に背き去った人間には崇高な清い喜びはなく、聖なる感激はない。ただあるものは物質的快楽と動物的刹那的な悦楽だけである。

われらの故郷は天の御国であるにもかかわらず、自分の故郷を忘れ去って仮りの植民地である地上の事に心を奪われここを永住の地と錯覚しているのである。

かくの如く神の御支配を拒み、サタンの僕となっている人々の間に、われわれが天国の民として生きて行こうとするならば、どうしても戦いが要求される。だからパウロは「信仰の善き戦いをたたかへ」（テモテ第一六・一二）と言い「この世と妥協してはならない」（ロマ一二・二）と勧め且つ警告しているのである。

神の支配を拒んでいるこの世に追従して行くならば、我らは天に国籍を有する者の資格を失うことになるであろう。

主イエスは当時の学者、パリサイ人たちの反対を押し切って、罪人、取税人、遊女にまで福音を説き、救いの手を差しのべられた。

しかし主はどのように罪の世に深く足を踏み入れられても、彼らと妥協されるようなことはなかった。

主イエスは「あなたがたは世の光である」と、私たちに語っている。パウロも「光の子供の如く歩みなさい」と勧めている。

主イエスこそは「もろもろの人を照すまことの光」であり、我らは光の子供、光の使者として、悪しき、曲れる、闇黒の世に光を掲げる使命を与えられて地上に遣されているのである。

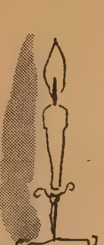
パウロが「私はキリストの代理者である」という自覚をもっていたように、われわれもまた、光の子供、世の光としての使命に立ち上らねばならない。

われわれは、この世と妥協することによって人々から歓迎されるのではなく、正義と愛と真実と柔和とをもって人々と交り、神の栄光を顕したいものである。

三位一体後第二四主日

死と復活

一一月一二日



主日の趣旨　三位一体節の特禱、使徒書、福音書として準備されているのは本主日をもって一応終り、次の主日は降臨節の先駆としての降臨節前主日一つを残すのみであるが、本年は移動祝日の関係で三位一体節は二五主日まで延長され、そのあとに降臨節前主日が来る訳である。

前主日において「天に属する者」たるの自覚を促されたわれらは本主日においてキリスト者の意極の目標である神の救いに与ることにより聖徒の嗣業にあづかるに足る者とされんことを祈るのである。

死は人の世の常であるが、我らの身辺に及ぶ時、我らは粛然として、今更のように人生の無常を思うのである。

通夜のよる、澄み切った秋空に眺める月の光は、無常の人生を指し示す光とも思われ、永遠を思へとの暗示とも読めた。

「生年百歳なし、常に千歳の憂いを懐く」とかや、我に生年百歳なくしかも永遠を希い、永遠なるものを慕うのである。

しかも、かくの如き我らの切なる願いを無視し、突如として死は我らの眼前にその怪異なる姿を現わすのである。

我らの生は常に死に直面する生であり、死をはらんだ生なのである。されば、我らが、もし大地に足を踏みしめて確かな足どりで人生の道を歩まんとするならば、死の正体を見きわめ、死後の世界を確かめねばならないのである。

さて然らば、我らはどうしたら死の正体をつきとめ、何人から死後の消息を聴き得るであろうか。

聖パウロは「私たちの住んでいる地上の幕屋がこわれると、神からいただく建物、すなわち天にある、人の手によらない永遠の家が備えてあることを、わたしたちは知っている」（Ⅱコリント 五・一）と言っている。

このような確信は一体どこから与えられたのであろうか。

申すまでもなく十字架に死んで甦りたもうた主イエス・キリスト、復活の初穂として、我らに先立って我らの行く手を指し示し給うた主イエスの保証によるのである。

「あなたがたは心を騒がせないがよい、神を信じ、また私を信じなさい。私の父の家には、すまいがたくさんある。……わたしは……あなたがたのために場所を用意しにゆく……そして……場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたを私のところに迎えよう。私のおる所にあなたがたもおらせるためである。」（ヨハネ 一四・一―三）

このような明確な保証を私たちは、主イエスのほかの何人から聞くことができるであろうか。

復活の主を信じ、永遠の生命の希望が確かなものになった時に、初めて永遠を目指した人生が初まるのである。聖パウロがピリピ人に贈った手紙には「わたしの願いを言えば、この世を去ってキリストと共にいることであり、実は、その方がはるかに望ましい。しかし肉体にとどまっていることは、あなた方のためには、さらに必要である。こう確信しているので、わたしは生きながらえて、あなたがた一同のところにとどまり、あなたがたの信仰を進ませ、その喜びを得させようと思う。」（一・二三―二四）といっている。

結局、「生きるにも死ぬるにも、わたしの身によってキリストがあがめられる」（一・二〇）ことを願うのみであった。

実に鮮かな、そして明確な死生観である。

孔子は「我いまだ生を知らず、いずくんぞ死を知らんや」と言ったと伝えられるが、我らは死を知り死後の世界を確めることができて初めて生を知ることができると云うべきであろう。

「わたしたちが信じているように、イエスが死んで復活されたからには、同様に神はイエスにあって眠っている人々をも、イエスと一緒に導き出して下さるであろう」（使徒書）ことを確信して逝世者を記念し、そして希望にみちた、確かな足どりで、主のお召しを蒙るときまで与えられた持場を守り、主の御栄光を顕したいものである。

くことのできなかった懐しい、愛情のこもった呼びかけであったに相違ない。私たちは、このような主イエスのお言葉のはしばしにさえ、限りない主の御慈愛を悟らしめられるのである。

主はことばをつづけて「しっかりしなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです」と仰せられた。

この主のおことばによって、この女の信仰が、ただ単に病気のいやされんことのみを求める御利益信仰ではなく、生命を賭けて主に従おうとする真実があったことを表している。

それにしても何と言う奥床しい、優しい主のお心ではあるまいか。癒して下さったのは主イエスであることは間違いないことである。しかし主は「私が癒して上げたのだ」とは仰せられなかった。

「さあ、しっかりするんだ、あなたの信仰であなたが救われたのだ」苦しめられ、痛めつけられ、踏みつけられて、半死半生の状態にあった娘の心を引き立て、元気づけ、ふるい起たせるために、娘を激励しようとして居られる主のお心持ちが、ひしひしと私共の心に伝わって来る心地がする。

かくて娘は癒され、そして救われたのである。

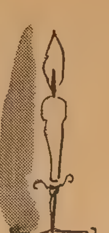
このあとに会堂司の娘が主によって起たしめられた物語がつづいている。一八節から二六節にかけて、この二つの物語りが組合わされていることは、まことに興味深く、かつ意味が深い。

主の前には顔役の会堂司の娘も、無一文の不浄の娘も、（わが子）であることに変りはなかった。そして（今、息を引き取った）と言う、人間の眼から見た危急の場合が主の眼には必ずしも危急の場合ではなく、一二年間病み疲れ、財産を使い果した絶望の女に、より以上の危急を感じられたのである。

三位一体後第二五主日

世の終りの時

一一月一九日



主日の趣旨　前にも述べたように三位一体節の主題は第二四主日をもって終り本主日からは降臨節を迎える準備の期節に入る訳である主日の名称は三位一体後第二五主日となっているがむしろ実質的には降臨節前第一主日とでも言うべきであろう。

主題　死を超えた生

福音書　マタイ　二四・一五—二八
使徒書　テサロニケ　四・一三—一八
旧　約　創世　六・五—九

祈り　神よ、ひとりの御子は悪魔のわざをこぼち、我らを神の子天国の世継ぎとなさんとて世に現れたまえり。願わくは我らこの望みをいだきて御子の清きがごとくおのれを清くし、ついに大いなる威光をもって再び現われたもうとき天の御国に至りて御子に似ることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にまして世々統べ治め給う主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。　アーメン

説　教

数ケ月前から、悪性の腹部疾患で病床にあった義兄が、数日前、遂いに逝世した。

聖書研究のための毎週の教案



愛の讃歌

Ⅰコリント　一三・一―一三

(1) 「隣人愛」が良きサマリヤ人の譬をもって、私共の耳に入ってより久しい。キリスト教の本質は愛を除いて外になしとは、唯にキリスト者のみならず、それ以外の人々のよく知る所である。しかしその理解の何とヒューマニスティックである事か。また女性的感覚での受容である事か。自分の行為の正当性を主張するために、愛は時に他人を審く武器になり切らぬとは限らない。その厳しい一面を忘れているのは、ここ「愛の讃歌」と呼ばれるコリント人への第一の手紙一三章のパウロの言葉を正しく理解しない所から起る。神が人それぞれに与え給うた賜物は種々あるが、もっとすぐれた道としての賜物は？　それは愛に外ならないといい切ったパウロの語調の中に、神の与え給うた愛の格調の高さを味いたい。

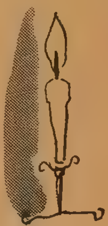
パウロは一―三節まで愛の無比なる価値につき、一二章にのべて来た事を別の表現でのべる。まず智恵の言、知識の言、預言、異言に対し、第二にいやしや奇跡等の力ある業に、又非凡な人間の洞察力に対し、山を移す程の熱烈な信仰に対して。さらに、神の国をつぎ、永遠の生命を求むるために自分の全財産を人に施す、かの教法師の信仰のように、また自己犠牲の極に自分を立たしめようとも、よしそれが人間の最大の価値としても、それは結局自己中心の領域を一歩も出るものではなく、愛なき行為として、空しく、価値なきものと終るのだという。そして四節前半で愛の定義を、四節後半―六節前半で否定の形で愛を規定し、六節後半―七節で、愛を積極的に規定する。後半八節以下では、愛の永遠的生命力を（八節―一〇節）、信仰と希望の関係（一一節―一二節前半）、知識と愛の関係（一一節後半）、最後に愛の無比性を結論だけ、力強く信仰生活の愛を高唱するのである。今全てにわたって詳細に眺めてゆく紙数を持たない。そこで四―七節までを特に取り上げて学び度いと思う。

(2) 「愛は寛容であり、愛は情深いパウロは奇を衒う人ではない。ありふれた表現で愛とは忍耐という事だ、進んで親切をなす事だという。「寛容」とは μακροθυμια（マクロスミア）で μακρος（マクロス）は「永い」を意味し、θυμος（チューモス）は「怒り」であるから、本来爆発性の怒りを永く抑制するという意味での忍耐すなわち「今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしてこられたが……」（ロマ三・二六以下、九・二二）とあるように、人間の罪をみつつも、審きを直ちに下す半なく、これを救い給わんとする、キリストにおける神の業にその本質を有する事を、示しているのである。それは「神の怒り」に対する「神の忍耐」であろう。この対比の中に、愛の本質を見抜かねばならぬ。では「慈悲」χρηστοτης（クレーストテース）とは何か。語源の χραομαι（クラナマイ）は用途、実益を意味し、その実践性と効果の面が暗示せられるのである。す

降臨節前主日（三位一体後第二六主日）

最後のさばきに対する準備

十一月二六日



主日の趣旨　言うまでもなくアドベントに入る心の備えをなすべき主日である。本カリキュラムに掲げられている使徒書、福音書はルーテル教会が採用しているもので、聖公会は使徒書代用としてエレミヤ二三・五―八を、福音書はヨハネ六・五―一四を用いている。しかし両者ともアドベントへの準備をテーマとしていることに変りはない。

主題　備えして主を待たん

福音書　マタイ　二五・一―一三
使徒書　Ⅰテサロニケ　五・一―一一
旧　約　ゼパニヤ　一・一四―二・三

祈り　主よ、願わくは御民の心を励まし、喜びて主の御わざにたより、その大いなる恵みによりて御助けにあずかることを得させ給え。主イエス・キリストによりて、こいねがい奉る。　アーメン

説　教

本日の福音書には主イエスの終末観の一端が示されている。

「天国は……」と言うことばで語り初められているこの譬は、神の国が成就するに先立って主イエスの再臨が実現することを示し、その日、その時のために、今日、唯今からその備えをなすべきことを警告しているのである。

パレスチナ地方では結婚の際に、花嫁の家に花婿が迎えられることが、現在でもしばしば行われるということである。

晴れの日を迎え、胸ときめかせて、花婿が到着する頃には、花嫁の家の門前には、選りすぐられた、みめ美しき乙女たち十人が花嫁の代理者として待機しているのである。

彼女たちはいづれも、灯火を携帯している。思慮深い乙女たちはあらかじめ器に油を満して待機していたが、愚かな乙女たちは選ばれた喜びと、晴れがましさに昂奮し、遂いに器に油を満すことを忘れ、浮き浮きして門辺に出掛けて来たのである。

だが、花婿の到着は意外におそく、乙女たちは門辺に座して仮睡してしまったのである。

夜半、「花婿の御入来だ、早くお迎えに!!」と言う呼び声に眼を覚した乙女たちは直ちに灯火の用意を整えた然し愚かなおとめの器には既に油は尽きていて火は点ぜられなかった。思慮深い乙女たちに油を分けてくれるように頼んで見たが彼女たちは言った「私たちと、あなたがたに足りるだけは多分ないでしょう。店に行ってあなた方の分をお買いになる方がよいでしょう」と。かくて彼女たちが油を整えて帰って来た時は既に門は閉じられていた。

「主の日は盗人が夜くるように」（Ⅰテサ五・二）やって来る。主を迎える備えを怠っているならば「ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むように、突如として滅びが」（五・三）我らの上に襲いかかって来るであろう。

この譬の油のように信仰は他人の借り物では役に立たないのだ。

立教女学院チャプレン　大和田　功

抜き得たパウロの愛の瞳を、共に学ばねばならない。詳しくは、中村獅雄著「信・望・愛」新教出版社を一読されたい。美しい文章の中に信仰の愛の泉を感得出来よう。

単元五　信仰の勝利

設定の理由

信仰は決定的な勝利の約束であり、確信である。みことばの偉力によって現実の悪の力にも耐え世に勝つ信仰を確立するために、パウロの信仰のすすめについて研究することとした。

目　標

キリスト者の現実生活は、みことばに基く信仰の勝利の生活であることを学ぶ。

(一) 使徒的宣教

Iコリント　一五・一―一一

(1) 復活の信仰の否定は即キリスト教信仰の否定である。信仰を道徳的に理解しようとする人々、現在の自分の平安のみを願う心に復活信仰は不必要であろう。復活信仰を追求せずして、よくキリスト者であると自称する人々の何と教会の内に多き事ぞ。コリント教会の従来の数々の問題も、煎ずる所、復活信仰の否定に一切の原因があった。パウロはそこで復活論を展開するに当って慎重な言葉をもって、これが自分単独の思想でない事をあらかじめ語るのである。一―四節までのパウロの言葉の中に、いわゆる「使徒的伝承（パラトシス）」への彼の信仰の深さと、伝道への熱を、そしてそこに一切の信仰の根拠のある事をいわんとする気魄を共に味いたいと思う。今回は一つ一つの字句を詳細に学ぼう。

(2) 「わたしが以前あなたがたに伝えた福音」（τὸ εὐαγγέλιον εὐηγγελισάμην）という語句はその中にメッセージに含まれている福音信仰の真髄、またそれを受けた悦びが満ちつつそれを伝えようとする真執さが、その繰返しのようにみえる表現に全て示されている。私はこの福音をうけた。この神の恩恵である所の此の私がうけし福音を、本当によきおとずれ（イザヤ五二・七）として今伝えようとする、否伝えて来たのだというこの心情が鮮かに見える。すなわち福音に接し、新生を与えられ、福音に生きたパウロにして、よく言い得る表現であろう。そこにはこの福音の真髄を忘れ、且つ不必要なものとなしてしまったコリント教会の信徒に対して、その不信仰を歎き且つ悲しみつつ、信仰者としてあり得べからざる姿を目の当りに見た伝道者の苦喪と、又再びその信仰を換起せんとする情熱を見る事が出来よう。

「あなたがたが受け入れ、それによって立ってきたあの福音を…この福音によって救われるのである。」ここにパウロは自分の信仰経験に照らし、福音の復活の大切な事実を示そうとする。そしてそれは同時にコリントの信徒達においても同様の事柄だった。その事柄とは、次の三つの事を示している。それは、救に関しての過去、現在、未来の業である。一つ一つの間に καὶ が挿入されてその意味を、いわば福音の信仰が与えるクライマックスを示そうとするのであるか。特に「救われる」と訳される σώζεσθε（ソーゼステー）は既に「救の道」を私達が歩まされている事を暗示している語である。そこには救の完成の確信がある。

なわち神の愛・救・罪の赦しをキリストの贖罪の業に見、そこにある神の他の線、怒・義・審きを味うたものは、さらにそれを己が心の襞に止めず、善き習慣（χρηστος）にまで結晶するものでなければならない。それあって、初めて本当の愛になるのだ。思うに、そこには主の示し給うた愛の業の呼びかけの、あの平安が約束されているのである。「すべて重荷を負うて苦労している者は……、わたしのくびきを負うて……わたしのくびきは負いやすく（χρηστος）」と。この事は、共に負いつつ、その重荷を主によって負わされる平安が意味せられている。自分で苦難の一切を負うていると思う人は傲慢だ。主に負われている事のやすきにあって、共に苦難を負いあう所に、真の愛の業が生きて来る。何と今日の愛の観念論の教会における横行より。パウロの愛の言葉は、キリストの業の一点に全て目注がれて、語られている事を、まず味わっておこう。

次に八個の悪徳をあげる事によって愛の性格を浮き彫りにしようとする。(i)まず筆頭にあげられたのが「嫉妬」（ζηλος）である。それはユダヤ人の特質であり、それが主を十字架につけた事を、パウロは体験的に知っていた。それは熱心である。この熱心、熱情（Ⅱコリ一一・二）が神に向う時に信仰の熱さとなり、一度、人に向う時に、妬みとなるのである。神への愛に生きる時、よく人は人への関心を失い、妬みを失い、他への愛に生き得る事をよく示していると思う。教会の分争は、このゼーロスの在り方に事を発する。人への関心多き事は、他人の関心を自分に向けしめる事だ。そこに牧師また信徒への言あげが生れる。まさに嫉妬は悪の女王というべきであろう。(ii)「高ぶり」、(iii)「誇り」。この人の関心を自分に向けしめる心こそ、誇り、高ぶりに外ならぬ。それは自己満足、自己中心の極に外ならぬ。それこそこれを大審問官の位に坐せしめ、他を審き切る心情に外ならぬ。今日の世界の魂の病根は、この高ぶり、誇りにある。究極は神との対立感に外ならぬ。神への叛逆、否定。そこには愛は生れようにも生れては来まい。(iv)「不作法」ασχημονει とは「宜しきに適わぬ」精神のみにくき業の事である。それはコリントの頽発せる風紀を思わしめる。従って不作法をせぬ事は、美わしき業をなし、秩序を重んずる、すなわち全てを神の創造の秩序において導きゆかんとする積極的な業であろう。(v)「自分の利益」。それは罪のもつもっとも露骨な実行性を指す。そこには人間の自己追求の執拗さ、執念、執着が生れる源がある。それは遂に他の否定となり、他の死を願うばかりでなく、有形無形の殺人が敢て行われる。上役の死に思う自己の昇任の悪魔の微笑である。この自分の利益を求めぬとは、然し単に自己を捨てるという事を意味しない。それは神に己れを献げ、神の賜物に生きる事。そこに「人がその友のために自分の命を捨てること、これより大きな愛はない」（ヨハネ一五・一三）の言葉の生れる力がある。(vi)「いらだち」それは自己主張の他によって破られる時に己が胸に迫る感情で、闘争へのかり立てを内に持つ。それは共同体の破壊である。(vii)「恨み」勝手な解釈により事を曲げゆく感情である。事柄の責任を持とうとせぬ。それは性陰なる人の姿であろう。(viii)最後に「不義それは他の道徳的失敗への好奇心、弱点への興味である。今日ではそれが趣味にまで性格化されて大道をまかり通る。（週刊誌のスキャンダルはその標本であろう）。それは己が生活への他の視線を意識して、より他を醜さの中に落し入れる事によって、自分を高きにつけようとする意識を生む。全てこれ神を思わず、人のみを思う憎悪の感情に外ならない。斯く否定面を強調する事により、パウロは積極的な愛の規定を展開するのである。私共は、この否定の視線に、よく人間の罪を見

聖書における根拠を、そして第三に、復活の意味せんとする所のものを学んでゆこう。

(2) (A)復活の第一義的証言。それは教会の存在である。弟子達の体験・告白・献身・伝道そして今日の「戦闘の教会」へのエネルギーこそ第一の証言というべきである。ついで「主の日」の制定である。ユダヤ人が殆んどであった初代キリスト者達が、聖なる安息の日を土曜より日曜に変え、その一週のへめぐる度毎に、主の日としてこの日を覚えた事は、復活肯定の何より論証でなければならない。

(B)復活の第二義的証言としての聖書における根拠。一番早い文書上の証言としてあげられるは前回に出て来た一五・三以下の「使徒的伝承」である。次に使徒行伝中の説教に見られる、ユダヤ人クリスト者のケリグマの中にもられた復活を語った句（一〇・五〇―四二）。最後に福音書における復活物語である。四福音をそれぞれ要約してみるとよい。するとそこには「マタイでは、奇跡的なものの飾り縫いが少し見られる（二八・二―四）。ルカには、人によっては、現実好みの傾向と考えられるものも見られる（二四・四二）。しかし、全体として考えるならば、黙示文学的な特長がない点で、注目に価すると共に、実に、大部分は、あざやかで生々しく、自ら確証をもつ。マルコが、婦人たちが墓の空虚を発見したことを語る時、あるいは、ルカがエマオへの道行を記録する時、あるいはヨハネが、園でマグダラのマリヤとイエスとのめぐりあった箇所を物語る時は、実際の歴史を読んでいるような感じがする」（ハンター「新約聖書神学入門」七六頁（小黒訳）引用）であろう。いずれにせよ、ここでそれぞれの記録の一致する点は、(一)墓が空虚であった事、(二)復活は「三日目」におこったことである。第一の点から私共は次の事を示されるであろう。すなわち空虚な墓をめぐってのそれぞれの記録には、復活の主の非地上的な特徴と、地上的な特徴とが組合わされているという事である。復活の現実の特質を証言するに当って、福音書の記者達は、このような表現をとらざるを得なかったのだ。それ故「第一回の復活日の神秘を探ろうとする時は、本質的にかの世的なものが、――天的実在の一部が、時間と感覚とのこの世に侵入して、『信仰の目』をもった人々にその姿を顕わしたと考えるべきである」（前掲書七九頁）。即ち「イエスの復活は、弟子たちがイエスの伝道の間に抱いていた彼に対する信仰の復活」であった。イエスの復活は、信仰的事実である。信仰に基く所の終末的出来事の体験である。従ってそこには深い意味内容が顕示せられ、それが弟子達をして生き返えらしめ、新しい力を与えて、彼らを復活の証人たらしめたのである。

ここに起ったこの深い意味内容とは如何。それは又同時に復活の真実性の宣言でもあるのであるが、第一に「復活は義の証明」を意味しているということである。神の救の目的の啓示である。第二に「死の敗北」である。確かに死は一切の人間の存在を焼きつくす。その存在を、人格を、人間の相互関係を、そして愛すらも。しかしイエスは死んだが、神が彼に託し給うたキリストの人格の業と言とはそれによって焼きつくされるどころか、更に深くその意味を現わした。死は生となった。まさに「死は勝利にのまれてしまった」（一五・五五）のである。第三に、このよみがえりのメシヤのうちに神の支配が「力をもって」到来したことを意味する。新な時代の開始せし行為であった。新しき生命の到来である。第四に、主キリストに従う者に、永遠の生命の約束をもたらし給うたという事である（ロマ六・二三）。そして最後に「伝道の縦続」を意味した。パウロはいう「もしキリストがよみがえらなかったとしたら、わたし

「もしあなたがたが、いたずらに信じないで、わたしの宣べ伝えたとおりの言葉を固く守っておれば。」「いたずらに」とは「考えも充分にしないで、無思慮に、早急に」という意味で、それは自分の現在の考え、体験、そういったものを中心にして考えよう、受けとめようという態度である。事実コリントばかりでなく、福音が教会の講壇においてすら、このような皮相な福音理解の態度をもって語られすぎて来た。それは世俗の支配と潮流へのおもねりで、それは教会の分裂の力にこそなれ、真の愛の力とはなり得ない。今日の成る程の伝道の形態の中に「復活」を論じつつも、事実「宣べ伝えたとおりの言葉を固く守ら」ずに、返って人を迷いの中に入れるおそれを充分見抜かねばなるまい。

「わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは。」「最も大事」とは、復活の教義は根源的、枢要の、中心的かつ不可避の信仰の要義なのだという意味である。それは彼自身の主観的な造り話しでないという心がみえる言葉である。この事は、コリントの信徒が、受けかつ立ち、そして救の道に入れられていると同じように、自分自身も、使徒達より、そして教会より「受けた」所のもので、まさに伝承された客観的な確実性を有する所のものなのだ。勿論彼の救済経験はダマスコ途上の復活の主との出会いに存するが、この霊における救済経験と、あの使徒達の空虚な墓での復活経験とは、生前直接主を知る知らぬという差が存しようとも、「復活」の経験は、全き一つの事柄なので、そこに、使徒と教会の伝承を尊びつつ、その伝承に裏づけされて活かされている自己の経験の客観的確実性をここで言おうとしているのである。これなくして教会の普遍性、神の国到来までの経続的存在はその意味を失ってしまうからである。

斯くて彼はその内容を「キリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、そして葬られたこと、三日目によみがえったこと」を内容として、その伝承の正しき確実さを宣べてゆくのである。私共の入信は、異教の地盤の故か、唯一なる神の信仰の告白が先で、又それが強烈すぎるためか、後の信仰生活にあっては、キリストの贖罪と復活の信仰がその魂の中にどうも入り難く、仮に入り得たとしても充分に育たない。筆者すらそれを己が内に見る。それは同時に教会が、この最も大事なことを更に言葉と業とで宣べ伝える事を怠り、その理解の度合如何にかかわらず、この私にはそれが臨んでいる事を味わわしめない、教会の伝道の活力の弱さというものに連なるのではあるまいか。

復活の信仰

Iコリント 一五・一二―二二

(1) 前回でパウロの復活信仰の深さと、それを宣べ伝える情熱の姿を味わった。そこにあったパウロの確信は「もしキリストがよみがえらなかったとしたら、わたしたちの宣教はむなしく、あなたがたの信仰もむなしい」（一五・一四）という強烈な言葉で示されると思う。それは彼がうけた主御自身の啓示によるものであったが、同時にこの確信は初代のキリスト者の不動の確信であった事は充分に記憶されなければならないと思う。同時にこの確信のない所には信仰も生れず、今日の教会の伝道の活力の一切もここにあるのだが、一体世の人々の復活への潮笑に対し、私共は何と言って答えるべきであろうか。私共はこの為に第一に証言を、第二にその証言の

そして人間の罪によってはじめて惹き起された事態である。ここでは死と死後に継続する生とが、有機的、かつ自然な順序をなすのではなく、強烈な勢力同志が戦いの状態にある」（クルマン、「キリストと時」邦訳二四一頁）。その項点に「復活」が在るのである。従って復活こそキリスト者の一切の救の根源、神の審き、罪の詛よりの解放で、「永遠のいのち」が、その解放のきよきに至る実として結ぶのである（ロマ六・二二）。この事柄によってキリスト者はこの世にありつつも、「神の国を嗣ぐ」ことが出来るものとされているのである。ここにはもはや生を無常感の内に捨てさる考え方、一瞬の生を謳歌する享楽主義、或は又それより反動的に生れる生への現実主義、そういったものは生れる余地がない。唯在るものは、神の救済史の一点に関りを持つ自己の存在、永遠の生命の希望の中に、静止する事なき、神の国の宣教の上に立って、一刻も休む事なき、自己の生の把握なのである。この死の理解を通じて迫り来る、この己が身の生の把握が、パウロにあっては一五・五五―五七の感謝の言葉となって、彼の唇から奔り出たのは、又当然の事であった。

(3) まさに、そのような意味で、キリスト者の生涯は感謝なのである。「死のとげは罪である。罪の力は律法である。しかし感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜わったのである」（五六・五七）。そこに「堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい」という奨励が生れて来るのである。パウロの命令、奨励は、道徳命令ではない。既にそのようにされているのだから、そのようにあるのが、キリスト者の自然であるというのである。私共は、このキリスト者の自然の姿に生きているだろうか。反省せねばならぬ。まず大切な事は、確固たる生の歩みである。永遠の希望の足どりである。そして、伝道と奉仕の、主の御旨にそった歩みを続けゆくことである。復活を、自己の現実の生活に活かし、強め、深める力となさなければならない。時は、最も静かに自分の信仰を反省するによき、又神の実の収穫の時期だ。私共をまづこの生に献げる事により、絶望の中にある周囲の人々に永遠の生命を分ちつつ、その人々を初穂として神に献げよう。

アイルランドで児童画国際展

来年の夏にアイルランドのベスファストで世界中の国々より代表的指導者が集って、キリスト教教育研究協議会を開きますが、その期間に、キリスト教会に行っている子供たちの手で書かれた児童の画の国際展が開かれることになりました。

日本からも数々の画を送ることになりましたが、展示する画は聖書の中のお話をあらわしたもので、テーマが定まっていますが、すでに数校のキリスト教学校でこころみられていますが、日曜学校からも送って欲しいと希望してますので、出品できる可能性のある教会学校は至急お申出下さい。

連絡先　東京都中央区銀座四ノ二　NCC教会学校部

たちの宣教はむなしく……」（一五・一四）と。まさにイエス・キリストの真の神の国の伝道の業は終らなかったのである。止められなかった。むしろ続行し、前進した。ここに主を首とする教会の終末的意義が明瞭にされ、福音発展の一切の力が存する意味がある。私共は、この聖書に示された「復活」の真の意味を、現在の私共の信仰の力として受けとめねばならない。この事の宣言と活動とが、一番、今日の教会で学ばれなければならない点であろう。

更に詳しく、且つ邦文献として手頃な参考書は山谷氏「基督教の起源」上巻（一八一—一九二頁）であろう。

主のわざにはげめ

Iコリント　一五・五〇—五八

(1)　私共日本人は「死」に対して淡白のように思う。無常感と結びつきながら、唯避けられぬものとして受けとめ、又それを思う事を不浄の事として眺め、「死」の積極的な意味に就いて問う事を中止する。この夏、筆者の牧する教会で信徒の一人の方が逝去せられた（このような場合、私共は死を一語で何というべきなのだろう。教団の式文では〝この世の生涯を終ってみもとに召された〟〝世を去る〟〝霊は肉の束縛からとき放されて〟等の言葉を用い、故人に対して〝死〟という言葉を殊更に避けているのは興味深い事だ。昇天というべきか、問題がこの死への言葉において既に神学的な問題、又信仰の理解が要請せられている事に気づくであろうその時の人々の示した色々の反応に注意をひかれた。或る人がいわく。「避けられない事だ、無常とあきらめて、その霊を慰める事だ」と。勿論非信仰者である。「御年は何才だったか。そういえば、同じ年齢で亡くなった人が誰々、誰々、お互に気をつけなくては……」（信者）。「ああ家の母も同じ年頃だ。死後の事を今の内しっかり考えて置かねば、あの方はちゃんと葬式をするだろうか。前後の供応も大変だろう」（信者）。一切が現在の己の幸福感を中心に眺められている。死とは葬儀であって、自己の死への、即ち自己の信仰とは無関係なのである。説教、又教会の指導の、主の復活を、死を語る事をやめ、現在の自己の個人的な幸福に対する未来の希望を語る事の多きが、この様な結果を生んでいるのだろう。勿論、正しい復活信仰を語った人は居るのだが、少し極端な例を右にあげたまでである。私共だって、案外ここらに停迷しているのであるまいか。

(2)　復活の信仰は、終末史的出来事の体験であった。それ故、神の救済史と深い係りを持つ事柄である。それ故、死も又この救済史の立場から、聖者に於てのべられ且つ受けとめられている事を学ばねばならないのである。「死」とはその全き怖ろしさに於て、根本から神に逆うものとして「最後の敵」（Iコリ一五・二六）として対決せられる。パウロはそれをアダムの反逆の中に見た（同二二）。即ち聖者は創世紀の失楽園の物語りを通し、最初の人、アダムが蛇によって神への不従順に誘われて、生命の樹に至る道が閉された事を比喩的に示している。従って死は「罪の価」（ロマ五・一二、六・二三）なのだ。ゲッセマネのイエスにさえ「恐れとおののき」（マルコ一四・三三）を与える所のものである。従って死とは唯避けられない運命的な事柄として事象的に単純に受けとめらるべきものでもなく、又肉体の牢獄よりの解放者、又或る存在形式への「自然的推移」でもない。「死、消滅、凋落のすべてが、神に逆った、

る。

エマオのキリストの記事は、まことによく、これまで述べてきたところをうらずけるのである。いな、むしろ、この記事が、教会の原型をしめしているのである。第一に、キリストご自身のことであるが、たしかに、キリストは、ご自身を、弟子たちの目のまえに見せたもうたのである。つまり、キリストは、ご自身を啓示されたのである。それは、まがいもなくキリストであった。それにもかかわらず、弟子たちは、はじめ、これが、キリストであることをみとめることができなかった。みことばをきき、パンをさいていただいてはじめてキリストの姿を拝することができたのであった。このことから、わたしたちが、学びうるのは、キリストは、啓示されつつもなお、隠されておいでになるということである。ルターは、この間の事情をよく知って、「隠された神」について深い理解をしめしているのである。

キリストは、神を啓示なさったのであるが、キリストの啓示は、デパートの展示会のようなものではなく、啓示されながらも、なおも、隠されているという不思議な仕方が、用いられているので、このような事態につながりをもつには、それに匹敵する手段をもっていかなければならない。それが、「信仰」である。信仰を通路としてのみ、啓示されながらも隠された神にむすびつくことが、できるのである。

ご自身を啓示なさりながら、隠されていたもうキリストを媒介とする教会は、これまた、隠されていたのである。どのような姿かといえば、教会の姿は、実に、みすぼらしい姿として、この世の目には、うつるのである。キリストが、十字架の恥をうけたもうたように、キリストの教会は、恥をうけるのである。馬鹿にされ、つばきされ、投石されるのである。教会は、この世の目には、乞食に見えるのである。しかし、これは、教会の隠された姿であって、ここにパウロの言葉が、あてはまるのである。「わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰らない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負うている。それは、またイエスのいのちが、この身に現れるためである」(第一コリント四・八―一〇)。キリスト者個人々々もみすぼらしい姿に見えるが、それがやがて、教会の姿でもある。

しかし、このみすぼらしさのなかに、この世の力にまさる力が、隠されているのである。だから、キリスト者は、目をキリストからはなしてはならない。キリストの力だけでは、物たりないと考えて何か、これにつけくわえようと考える人も、わたしたちのなかにあるのだが、そうするとすぐさま、教会のもっている本質的な力が、弱められてしまうのである。「家」とは、踏めば、つぶれてしまいそうなものである。実際、大ローマ帝国の時代に「家」などもち出すのは、愚なことであったかも知れない。しかし、このみすぼらしい家が、どれほど大きな力を出したことであろう。考えなければ問題である。

家の教会

使徒　一・一二―一四
使徒　二・四二―四七

キリスト教は、東洋からはじまって東洋にかえるという、じゅん

信徒学級

家にある教会

教会の源泉的な姿

ルカ　二四・二八―三二



教会とは何であるかと、問われるなら、何と答えたらよいであろう。わたしたちは、自分のぞくしている教会堂を頭にうかべながらその答えを用意するかも知れない。しかし、それは、満足な解答とはならないであろう。大体において、いわゆる外国伝道地として、福音の宣教をうけた東洋の各国においては、三つの段階をへてきている。最初の段階は、派遣されてきた宣教師を中心とするもの、第二の段階においては、その伝道地で養成せられた牧師を中心とするもの、第三の段階では、第一、第二をも含めて、全信徒の交わりを基礎とするものである。日本においては、この三つの例を、わたしたちの目で、いま、見ることができるのである。第一と第二の段階は第三の段階にいたるまでの準備にすぎないのであるが、現実にはそこから一歩も出ない場合もある。そうなると、理論的には、どんなことをいっても、実際においては、教職とか聖職とかいうものが一般信徒と一線を画する階級制となる傾向をもってくるのである。これが、救いの問題にまでおよんできて、救いに関しては、聖職が優先権をもつといったことにでもなれば、また宗教改革が、必要になってくるのである。

新約時代のようすを見ると、福音の宣教のできそうな場所は、どこでも利用されたようである。シナゴグでも、広場でも、家でも、宣教の場となった。ことに、「家」が、宣教の役割をになったことは興味深い。パウロの書簡にも、「家の教会」という表現が見うけられる。キリストを信じる者たちが、一つの場所に集められて、キリストを媒介とする交わりをもつとともに、これらの人々が、散らされて、家にかえれば、そこでもまた、みんなが集められたときと同じ質の交わりがもたれる。家は、教会なのである。二人三人が、キリストの名において集れば、それが、教会であるからである。ここで注意しなければならないことは、ともすれば、「集められる」ことと「散らされる」こととを、きりはなしてしまって、そのどちらかに、片してしまう危険があるということである。この二つは、きりはなされなく、二つは一つであることを記憶しなければならない。重要な点は、キリストが、真中におられるということである。そして、キリストのみことばをきき、キリストの血と肉とにあずかるということである。この二つが、教会の目じるしである。みことばにおいて、罪のゆるしをきき、典礼において、同じく、罪のゆるしをきく。みことばの語られるところそこに、聖霊のはたらきがあり、聖霊のはたらきのあるところ、そこに、いのちと救いとがあ

か。それにしても、行きあたりばったりではよくないから、一つの共通した、大まかなプログラムをお互にもっていることは、どうであろうか。第一に考えられることは、家の教会で、聖書を学ぶということ。これは、所属教会での定期の聖書研究会の基礎となるものであるが、それだけに、聖書の伝えるメッセージを、できるだけ深く知ることに努力しよう。わたしたちは、骨身をけずって聖書のメッセージととり組むことがあまりない。牧師の話を聞くことだけにたよって、自分で、聖書にとり組むことをしない。聖書と「わたし」との関係が、密接になればなるほど、聖書のメッセージは、「わたし」に切実なものとなる。第二に、祈ることを生活の基調としよう。いつでも、どこでも、祈ることのできるようにしよう。ひとりいるときでも、家族の者といるときでも、職場でも祈ることができるようにしよう。祈りの形式にこだわらないことにしよう。幼児が、父に話しかける要領である。これが、できるようになると生活は、いきてくるにちがいない。第三の点は、第一と第二との土台に立って自分の生活のなかで、道をきり開いていくのである。キリスト者はキリストのなかにある者だから、キリストが、啓示されながらも、隠されておいでになるように、キリスト者も、そのようである。この世において、広く、隣人と接触すれば、問題を感じることばかりである。現在の政治、経済、社会等すべての機構に対し、問題を感じない者はないであろう。それかといって、その解決に、何か借り物をもってきて、手っ取り早くかたずけるというわけにはいかない。ここにキリスト者としての試練がある。この試練のなかで、わたしたちは、目標を与えられるのである。まだ、苦しみが足らない。みんなこぞって、試練のなかで戦おう。そして、その成果をもちよって、中間報告をしあおう。そうすれば、また新しい力が出てくるのである。家の教会の役割は、大きく重い。初代教会の進展が、家の教会に負うところが、多かったことを思い。この現代版をわたしたちのうちにもつよう努力していきたいものである。

宣教の対象としての家

使徒　一六・二五―三四

「家の教会」というとき、二つの意味にとってもよいと思う。一つは、一つの家庭全体が、キリストを信じていて、キリストの教会の細胞の一つになっている場合。いま一つは、キリスト者の家庭を開放して、隣人のキリスト者が集まる場合。一つの町、一つの村の共同体のキリスト者たちの集まるセンター。

しかし、家の教会は、他の家の教会を生み出す。一つの細胞は、他の細胞を生みだす。次から次へと細胞の数は、まして行くべきものである。それが、生きている教会の姿である。だが、ここでとどまってはならない。家の教会は、孤立化を破って、他の家の教会といつも接触し、交わるというところまでのプログラムをもたなければならない。キリスト者に孤立化はありえないからである。

以上で、家の教会の性格が、述べられたのであるが、日本には、家の教会の既成品はないのだから、キリストの教会は、家の教会を生みだすように推進しなければならない。これまで、わたしたちは個人をねらってきた。もちろん、この方法を、スッカリすてる必要はない。それどころか、もっとこれに力を入れなければならない。しかし、同時に、家の教会の重要性を、みとめて、これを生みだす

かん運動をしている。その間に、キリスト教理解が、深められた点と稀薄になった点とがあった。キリスト教のすべては、キリストなのであるから、この立場から、教えれば、その時代時代、また、場所場所における、キリスト教理解の深さと浅さとが、わかるのである。そして、キリストは、変りたまわないのであるが、キリストに対する理解は、変わっていくのである。このことは、教会の歴史をみれば、すぐわかることである。

家の教会ということに対する理解は、家というものに対する強い執着をもっている国においては、これをもたない国の者よりも、いっそう深い理解をもつのではないであろうか。原始的な時代において、家とは、生活の場、いな、生活そのものをあらわしたのである。明治のなかば頃に、片田舎に生活した経験から、いえることは、家が、生活の全体であったということである。家がくずれることは、生活が、くずれることである。家の教会というとき、これと一脈通じるものをもっているのではないであろうか。家の教会の大黒柱はキリストである。キリストこそ、信徒が、一つの場所に集められたときの主であり、散らされたときの家の教会の主でもありたもうのである。つまり、神への奉仕としての礼拝と神への奉仕としての実生活において、主権は、キリストにあるということにほかならない。家の教会が、世俗化してキリストが、しめ出されるなら、そのときは、家は、もはや、「教会」といわれなくなるのである。

家の教会とは、キリストの名において罪ゆるされた人々の集められる教会の延長である。あるいは、その教会の一つの細胞といわれるであろう。

使徒行伝によると、この家の教会の姿がわかる。家は、「あとつぎ」をそだてていくところである。食物が必要である。その食物こそ、神のみことばである。ルターは、「なまのみことば」ということをいったが、宗教改革の一つの強味は、家の世帯主が、子女に、「なまのみことば」を伝達したことである。家のなかでの相互のコンミュニケーションの手段は、「なまのことば」である。このことばを媒介にして、福音のコンミュニケーションをするのである。

キリストが、なまのことばで、はこばれるとき、それは、耳から心にまで、はこばれ、人々の心に、大きな変化をもたらす。キリストご自身のうちに、死から、よみがえりへの大変化があったようになまのことばで伝達せられるキリストの使信は、死からよみがえりへの大変化をわたしたちのうえにもたらすのである。教会と家との二元論ではなくて、すなわち、家にあり、家は、教会の細胞である。この有機的つながりを、わたしたちは、これまで、見逃してきたのではないであろうか。

よく質問せられることの一つに、「社会の行き方は、全く教会の行き方とちがっているのに、教会の行き方で通用するのか」というのがある。家の教会を立てようとすれば、この世との接触をうしなうという心配である。この問題は、日本だけの問題ではなく、各国ともなやんでいるのである。いわゆるキリスト教国というものは、世界に一つもない。しかし、いわゆる異教的要素の多い日本においてはキリスト教的要素の多い国とくらべれば、お話にならないほど国難は多い。しかし、それにもかかわらず、立つべき場所に立って行かなければならない。これが、現在における殉教であろう。そこで一つ一つの家の教会が、それぞれの場所で、創意工夫をして見ようではないか。失敗もあろう。成功もあろう。それを、家の教会の者たちが、もちよって、経験のわかち合いをしたらどうであろう

主が、教理問答を、家庭の者や家庭のはたらきをしている者たちに教えることになっている。これは、まさに、改革者たちが、神のみことばに立って、家の教会をつくることを目指していたことを物語るものである。

　異教社会における困難を、わたしたちはもっているのであるが、それにもかかわらず、新しい行き方を、こころみることは、決しておろかなことではないと思う。むしろ、この新しい行き方こそ、初代教会の、また宗教改革時代の古い行き方ともいえるのである。古いものをそのまま、まねるのではなく、それを日本の風土に調整しなければならないのはもちろんである。

信仰生活の場としての家

コリント　一二・二七―三一

　家は、もっとも近しい者たちの接触の場である。それだけに、信仰生活をするのに、もっとも、よい場ともなり、また、わるい場ともなる。よい場となるには、実全体が、聖霊による一致をあたえられているときであり、わるい場となるのは、その家のうちに、信者と未信者とがあって信仰の問題について分裂しているときである。第三の場合が考えられる。それは、家のうちに、第二の場合がありながら、両者とも信仰問題については、「ノータッチ」の態度をとるときである。しかし、このときは、信仰生活を本格的にすることは、かなりの困難が予想せられる。

　聖霊の助けをかりなければ、何事も、全く駄目であって、神の国のなかの仕事は、実をむすばないのである。

　聖書のなかに、子を生まない女は、恥とせられたといわれているのであるが、信仰生活においてもまさに、そのような状態が考えられるのである。家の者全体が、信じる者になったからといって、決して安心できないのである。信者の家庭の二世、三世は、また信仰を失ってしまって、全く手がつけられない状態になることがよくあるのである。これは、まさに、子を生まぬ女のようなものである。自分一代だけでよいということにはならない。

　わたしたちの知っている幾人かの社会的に有名人な人たちで、かって教会で洗礼をうけたという人はどれほど多いことであろう。いつしか、逆もどりをしているのであるが、その逆もどりは、前の状態よりも悪いのである。その原因をたずねれば、いろいろ理由はあるであろう。教会の指導にも問題があろう。本人にも、原因があろう。わかることは、キリストは、うるさすぎるということである。自由を与えると約束したキリストは、ちかずいて見れば、余り自由もあたえない。キリストに接近すればするほど、圧迫感をおぼえ、今の社会では、キリストについて行けない。

　そこで、教会は、キリストを水でうすめようとするのである。教会史を見ているとやはりこのような時代があった。その半面その反作用として、キリストを石膏細工のように造りあげる者もある。ユウズウ自在にされるキリストと、石膏細工に仕あげられるキリストとが、この世に提供されるのである。水ましのキリストは、祈りの対象とならずに、いろいろな運動に引っぱりまわされようとする。石膏のキリストは、床の間のかざりにせられている。

　問題は、ここにある。いずれも、キリストのみことばに、ききしたがうことを心ざしながら、ついにのいきつくところは、このよう

よう推進することが、大切と思う。このことは、個人をキリストにみちびくより、もっとむずかしいことである。忍耐と祈りとたたかいとが要求せられる。それにもかかわらず、この計画を、地道に進めていくならば、日本の教会は、面目を一新するであろう。今の教会は、牧師は、一城の主のような位置をたもっている。牧師には、力の限界がある。そのうえ、個人をみちびくことに重点がおかれているので、百人までの信徒を指導するのが、精一杯であろう。日本の教会の伝道の方法についての再検討が、考えられる理由が、ここにもある。求道者の獲得には、かなり、力を入れているが、信徒の成長に関するプログラムは、案外弱い。この点は、初代教会に学ぶことの必要を痛感するのである。

教会によっては、綿密な計画をもち、これに従って計画の実施をしているところもあろうが、大部分は、そのようなものはなく、むしろ、思いつき伝道が多いのではないであろうか。そして、個人への伝道に重点がおかれるのも、安易な道をえらんだ結果ではなかろうか。家を単位とすることは、むしろ、困難である。ことに、家族制度が、いまなお、のこっている日本においては、いっそう、むずかしい。これを、あえて実行するには、十分の備えが、必要であろう。地盤を十分に調査すること、地盤への接近など、ゆるがせにできないのであるが、この困難な家の教会を日本全国に普及させることができれば、日本における霊的革命が、実現できると思う。伝道その他の問題に関する委員会は、かなり、多く、その成果も、ある程度まで見るべきものがあるにはあるが、これならば、よいという案はまだでていないようである。

農村に、はいっていくのは、容易ではないのであるが、あまり、功をいそがないで、ジックリ、その土地に腰をおちつけることである。九州の一寒村に、黙々としてはたらく、宣教師の一家がある。家の教会の典型とも見えるような家庭である。この先生は、その土地の人々をキリストにみちびくことを、目標とし、ひたすら、農村人との間の壁を破ろうとつとめている。「十年かかるかもわかりません」という言葉は、文字通りにうけとられる。数年を経たが、まだ、農村人をキリストにみちびくことはできない。聖書研究会には、数名の出席者がある。しかし、その人々は、土地の人たちではない。

土地の人々をえることのむずかしさは、農村だけではない。小都市においても同じ問題がある。困難な問題でも、特定の地に根をはるには、その土地の人々をえなければならない。教会によっては、すでに、そのことに成功しているところもあるかも知れないが、大部分の教会は、近所の人は、来ないことにきめていて、案外近所の人々に対して冷淡な態度であるようである。このような模範を教会自体が示せば、家の教会の成立も、いささか心細くなってくるのである。現在の教会が、一考を要する点であると思う。

十六世紀の宗教改革の際中、改革者たちは、教区の視察をしたのである。つぶさに、牧師や教会員の生活状態をしらべた。そこで発見したことは、どれほど、教会生活がゆるんでしまっていたかということである。そして、その原因は、キリスト教そのものを知るところが、きわめてすくなかったということであった。主の祈りを知らない者も多かったということである。牧師のなかには、教会の羊飼いの重職を第二にして、店を開いていた者もあった。改革者たちは、まず、この状態を除くことが第一の仕事と考えたのである。そして、それを実行した。ルターの大小教理問答も、このことに一役買うためであった。教理問答に指定されているように、一家の世帯

今月の家庭科

ロール・プレイ

二組でお茶を



【ロール・プレイの演じ方】

ロール・プレイとは一種の簡単な劇のことで、全衆の前で登場人物（こゝでは四人）が、椅子にかけ、全衆に向き合ったまゝ、この脚本を読む。ゼスチャーや動きはいらない。ただ脚本朗読の時に、多少声色を使って感じを出せばよい。司会者は最初にロール・プレイとは何か、登場人物の役割と全衆の役割について説明し、読み終った後に、全衆の質問に応え、ディスカッション（全衆の意見の開陳）を導くようにする。脚本が四部必要であるから、この雑誌「教会教育」をあと三部取り寄せて用意し、予め演者にザッと読んでおいてもらう。

【登場人物】

司会者は次の人物と家庭情況を説明する。

中村家の夫（41才）会社員
〃　**妻**（38才）　子供三人の母、中二の娘、小五の男児、小二の女の子
鈴木家の夫（38才）教員
〃　**妻**（32才）教員、小五の娘一人。祖母が孫の世話をしている

【情況】

中村家夫妻が隣家の鈴木家を訪ね、子供の問題を中心にして、お互いの家庭の問題を語り合うという場面。お茶など出しながら。

【ロール・プレイ開始】

中村妻「お宅さまなど、お子さん一人で気楽でいらっしゃいますね。お子さんをおばあさまにおあづけなさって、お二人で働いていらっしゃるなんて、とても近代的で、うらやましいですわ。」

鈴木妻「とんでもございませんわ。この人が安月給なもんで私まで働かなければならないんですから、とても大変なんですよ。女はやっぱり家庭にいるのが一番だとつく〴〵思います。その点中村さんの奥さまは一日中家にいてお子さまの面倒みていられて、とても幸福そうですわ。」

中村妻「あら、とんでもない。一日中子供のことで追い廻されてやりきれたものではありません。頭が痛くなりそうですわ。それにウチの人ときたら、全然子供のしつけをしてくれないんですよ。たゞ甘いばっかりで……」

中村夫「オイ〳〵。そんなことはないよ。しつけは考えていますよ。しつけは必要なことだっていうことはわかっていますよ」

中村妻「あなたは考えている、わかっていると、口でばかりおっしゃってるけれど、何一つ子供にしてやっていないじゃありませんか。だから私はあなたの分まで引受けさせられて、ついガミ〳〵言ってしまうのですよ。」

鈴木夫「まあ〳〵。そうおっしゃらずに、お

なところである。動機は、たしかに、この世を愛するがゆえに、キリストをこの世に紹介しようとしているのであって、その限りにおいて、まことに、シュショウである。

さらに、第三の場合は、キリストを独占して、自分だけが、キリストの弟子のような顔をすることであるが、この三種類の型は、すでに、教会のなかにあらわれたものである。

社会が、急激に動けば、動くほど、それに作用されて、教会の動きがでてくるのであるが、もし、わたしたちが、世界のキリスト者の実態調査をすれば、それこそ千差万別の結果がえられるであろう。なぜなら、キリスト教会は、いま、いろいろな、悪魔的な力に引きずりまわされているからである。

この危機をのりこえる一つの手段こそ、家を宣教対象とすることであろう。キリストの教会は、いつまでもつづくものではあるが、人間の側におけるキリストうけいれの態勢は、たえず、改革されなければならないのである。

イデオロギーのために命をかける者もある。事業のために、何もかも、投入する者もいる。わたしたちは、それをうらやましく思って、指をくわえて見ている。赤旗のもと、ハチマキもりりしく、絶叫している若者も見て、フラフラとしている人もすくなくはない。しかし、そのようないま、キリストにたちかえって、キリストのみこえをきくべきではないであろうか。

十字架の旗印は、かかげるのに、はずかしいのだろうか。

四世紀にしてヨーロッパを征服したキリストは、その力を、日本に示しておられないのだろうか。はなばなしさに、目をうばわれてはならない。むしろ、キリストの愛のみことば一つでも、隣人につたえる熱情をもとう。

運動は、一滴のしずくからはじまる。十二名の弟子は、今の幾千万と直結している。一家族のすくわれるとき、天に大いなるよろこびの声があがる。

ノアは、唯一者だった。あの当時の人々全部が、ノアを愚者と考えた。ルターは、ノアの確信をほめ、唯一人で、多数の考えに反して立つことは、おろかなことであるが、そのおろかなことを、ノアはやったのだといっている。

ノアの家族は、すくわれたのである。

一家族が、すくわれることは、全人類のすくいに関係をもつのである。

まがり角に来ている伝道方策を、この角度から、もう一度考えなおすことはむだなことではなかろう。

表紙の説明

使徒パウロのシンボル

使徒パウロは、開かれた書物（聖書）と剣とで示される。これはエペソ六・一七「御霊の剣、すなわち、神の言を取りなさい」というパウロの言葉から出たものであるが、伝道者パウロが、神の言をもって多くの人々の話にせまった使命がよく表わされている。

鈴木夫「実際、私が学校で教えている子供をみていると、しつけが全然なっていない子供が多いですね。父親は今言ったように忙しくて殆んど子供と顔を合わせたことがない。母親も自由教育だとか、欲求不満だとか新しい言葉は知っているが、実際にはシンの通ったしつけがなされていない。」

鈴木妻「そうかと思うと、母親は一日中子供のあとばかり追いかけていて、世話をやき過ぎる、それで子供が反抗的になって、学校へ来ると乱暴したり、ずい分残酷なことをしたりする子供も見えますね。これは逆にレジャーがあり過ぎて子供が犠牲になっているともいえますね。」

中村夫「お前なんかその組じゃないかな。」

中村妻「さあ、何だか心配で……」

中村夫「一度学校へ行って、先生にどんな調子かきいてみる必要がありはしないかね。」

中村妻「えゝそうしてみるわ。でも私、別にそんなに子供を追いかけてばかりいるとは思わないんですけれど……」

鈴木妻「私たちの場合は、ほとんど子供と一緒に過すことがむつかしくって、おばあちゃまにまかせっきりなもので、何だかなつかないような心配があるのです。叱ったりするとひどく反抗的になって、三日も四日も口をきかず、時々白い眼をむいたり、親のことをにらんだりするのですよ。気味が悪くって……」

鈴木夫「そんなことがあるかい。そういえば先日も夜の御飯に帰って来ていないことがあったな。どこへ行っていたのだろう。」

中村妻「あら、一度私共の家に来て御馳走したことありますわ。子供がとても喜んで一緒に食べてゆけって申したものですから……。御存知なかったのですか？」

鈴木妻「お宅にいっていたのですか。やっぱり兄弟が多勢いて、賑やかな方がいゝんでしょうね。時々は私ども二人とも遅くなって、おばあちゃんと二人で食べていることもあるんですって。」

鈴木夫「お前もそろ〱学校をやめて、家事に専念するんだな。そしたらもう一人ぐらい子供を生めるぞ」

鈴木妻「あらやだ。私なんかもう駄目ですよ」

一同「ハハ……」

司会者「以上でロール・プレイを終ります。こゝにあらわれているのは、平凡な、ごくありふれた夫婦の会話ですが、なかなか問題をはらんでいるようです。問題点を整理しますと、

一、夫婦共稼ぎの問題
二、共稼ぎをしなければならない日本の社会の問題
三、共稼ぎの親にとり残された子供の問題
四、一人っ子の問題
五、おばあちゃん育ちの子の問題
六、封建家族の問題（こゝでは直接あらわれていないが、背後にはありそうである）
七、夫の仕事の多忙、そのため
八、父親が教育者として子供に向えない問題
九、家庭内における父（夫）の役割と、母（妻）の役割、相手に対する期待と、期待はずれからくるトラブル。
一〇、子供のしつけの問題。愛情不足か愛情過多。きびしさのなさの問題
一一、結局、夫の幸福と妻の幸福は家庭内でどのように保証されるか。

数え挙げればこのような多くの問題が、このありふれた会話の中にかくされているわけです。みなさまも身に覚えのあることと思います。

ではこれから、みなさまもこのロール・プレイに出てくる登場人物の一人になったつもりで、どうしたらこういった問題が解決できるか考えて下さい。この二組の夫婦、中村さんと鈴木さんに対する親切な忠言（アドヴァイス）がありましたら、遠慮なく申し出て下さい。」

岩村　信二

互い男は忙しいですからね。やろうと思ってもできないんですよ。第一体が疲れちゃって、家へ帰ってくるとフラ〳〵ですよ」

鈴木妻「あら、それは私も同じよ。いえ、女の方がもっとひどいと思いますわ。男の人は家に帰れば、畳の上にひっくりかえって、『オイ、お茶!』だなんて威張っていられるけれど、女はこれからが忙しいんですからね。お夕飯を作って、洗濯物をして、つくろいものをして、その上、明日の学校の下調べもしなければなりませんからね。」

鈴木夫「だからそんなことは、ウチのおふくろにまかせておけばいいっていっているんじゃないか」

鈴木妻「そうはいきませんよ。私はやっぱりウチでは嫁ですからね。それに昼間は出来ないと思うから、せめて夜の間でも埋め合わせをしようと思って一生懸命になっているんですよ」

中村夫「なるほどね。夫婦共稼ぎって大変なんですね。ウチの会社にも共稼ぎで来ている夫婦がいるけれど、表面はとても楽しそうで近代的だなあと思っていたけれど……。」

鈴木夫「そうですよ。若い間は張り切って、女は家庭の中でぬかみそくさくなってはいけないから、一緒に働いて、同じ歩調で進もうなんて殊勝気で始めたんですがね、なかなか現実はどうして、大変なんですよ。妻が家庭内でできないことのしわよせがこっちまで及んで来ようなんて夢にも考えていなかったんですね、その点、中村さんはうらやましいな。ウチへ帰ってくれば、奥さんが待っていてくれて、さあお風呂だ、夕飯だってサービスしてくれるんでしょう。」

中村夫「サービス？ 冗談じゃない。サービスどころか、こっちがサービスさせられているんですよ。何しろ子供が三人も出来ちゃうと、こっちに全然手が廻わらないらしいんだな。『あなた。何をぼんやりしていらっしゃるの。子供をお風呂に入れて、それから学校の勉強を見てやって下さいよ!』。」

中村妻「あらいやだ。いつそんなこと言ったかしら。これでも良妻賢母のつもりなのよ。でも子供たちがきかないから、ついあなたの応援を頼みたくなってしまうのですよ。」

中村夫「子供がきかないといったって、それは母親の役目じゃないか。日頃上手に育ててりゃ、子供はちゃんということをきくものですよ。」

中村妻「あら、きいた風なことおっしゃるわね。じゃ子供の教育には父親はいらないっておっしゃるの。そのことは全部この私に委せっきりで、自分は忙しい〳〵といって、ロクに子供と夕御飯を一緒に食べたこともないじゃありませんか。一家がそろって夕御飯を食べるのが家庭生活の第一条件だって、いつかPTAで岩村先生にきいたことがあるわ。」

中村夫「岩村先生って誰だか知らないけれど、そんなことは今の日本では理想論だよ。とにかく忙しいんだよ。今の日本の社会は。」

中村妻「忙しい忙しいって、何が忙しいのか知れたものじゃない。ねえ、鈴木さん、要は心の持ちようですわね。」

鈴木夫「そりゃ、心の持ちようだけれど、実際今の日本は忙しいことは事実のようですね。忙しく働かなければ、ほかに喰われてしまうという資本主義の競争社会なんだから。レジャー・ブームなんていうけれど、私たちにとってはどこにレジャーの風が吹くかと思いたいぐらいです。」

中村妻「でも、たゞ社会が悪いっていっていたって、いつまでも問題は解決しないでしょう。私たちはやっぱりこの忙しい社会の中にあって、どうしたら家庭のレジャーを生み出すか、どうしたら一家団らんして、子供の教育にも時間を割けるかを考えなくてはいけないのではないでしょうか。その点になるとウチの人は全然覚悟が違うんです。男は忙しいから、家庭内の雑事には口を出さなくってもいゝなんて割り切っているんですよ。」

中村夫「そんなこともないがね。」

にのさばっているため、主をお迎えすることができずにいるのではないでしょうか。省みられねばならないことです。

正しいはかりの観念

神に満たされた人は、人生に処する正しいはかりの観念をもっておらねばなりません。真のキリスト者の「広さ、長さ、高さ、深さ」についての観念は、この世のそれとはいささかちがったものであるはずです。もしわたしたちが、ただこの世の考えだけで、ものをはかっていたら、わたしたちの内なる人はついにこの世のもので満たされてしまうでしょう。わたしたちには、「すべての聖徒と共に」、キリスト者独自のものが必要です。

広さ―。世間では隔通のきくことを広さと同一にしています宗教信仰でも、あれもこれもというのが常識的で広いと賞揚されます。だが、そんなのは結局空です。イエスは愛と同情では広く、全世界を包むほど広くあられました。しかし服従においてはまことに狭く、律法の一点一かくもなおざりにされませんでした。もしわたしたちが同情の広さにあまえ神への服従を怠るならば、その人は狭い人です。そのような人にかぎって、自己の意見を固執し、他人をいれることができません。こうしてついには神までも心から締め出してしまうのです。で、キリスト者の広さというのは、どちらでもよいというような、あいまいな、ルーズなことではなくして、それはむしろ伝道的精神にあると思います。さかんな伝道の精神にもえている人こそ、ほんとうの神に満たされた人なのです。わたしたちは、ただ自己保全にだけ陥って、他への奉仕を怠ろうとする狭い思いからつねに救い出されておらねばなりません。

長さ―。人は時間に縛ばられて、永遠を忘れがちです。そして時間が与えることのできるものばかりを追求しています。一時的な、移ろいやすいものばかりに心をひかれています。こうして地上にだけ宝を積み、地上の栄誉だけを慕い、世につける歓楽にだけ憧れます。そして心はこの世のことでいっぱいです。だが、真のキリスト者は地上では一個の旅人であり一時の寄留者であることを知っています。そして眼をいつも永遠に向けて生きるのです。この世の一時的なものだけをみて、永遠にかかわるものを見失ってしまうようなことをいたさないはずです。

高さ―。さきんずれば人を制する式の生きかたではなく、キリストにあって大いなる者は、むしろ他に仕え、身を低くしていくことのできる人です。そして、ひたすら、主の栄光の高められることを願ってやまない人です。

愛に根ざして

このようなはかりで、ものをはかろうとすれば、「愛に根ざし愛を基とする」ことがたいせつです。わたしたちに、ほんとうに愛の真心があり、真理に対しまた人に対してやみがたい熱情がかきたてられているならば、その広さ、その長さ、その高さのはかりにおいて誤ることはないでしょう。正しく成長していくキリスト者、すなわち神に満たされる人とは、まさに信仰から来る愛に根ざし愛を基として生きる人のことなのです。

神の奥義

最後に、神に満たされる人は「人知をはるかに超えたキリストの愛を知る」ようにたえず努める人でなくてはなりません。受肉と贖罪にあらわれた「キリストの愛」、それは実に「人知をはるかに超え」た神の奥義です。この奥義について、今、わたしたちが会得しているところはまことに幼稚であり、いうに足りないものです。神の恵みの富は、さぐればさぐるほど深く、求むれば求むるほど限りがありません。わたしたちは、こうして、生涯真理へのやみがたい探究者であり、毎日が真剣な求道者でなくてはなりません。

（山内六郎）

十一月の婦人会

神に満たされよう



聖書　エペソ三・一四―一九。

　わたしたちは、大海原を走っている汽船の甲板に立って、そこいも知れぬ深い海に映っている太陽を見ることができます。また山間の湖水にボートを浮べて、その浅いけれども清らかな水に映っている太陽を見ることができます。あるいはまた、直径わずか数センチにすぎない泉をのぞきこんで、そこに映っている太陽を見ることができます。同じように朝、葉末にまろぶ露の玉をうち眺めて、そこに同じ太陽の映っているのを見ることができます。太陽はまさに自らを映すものに自分を合わせます。大海原も太陽の影を抱くに広すぎはしません。また草の上の露もそれを映すのに小さすぎはしないのです。

　と等しく、神はどんな人でも自分の力をもってお満たしになることができます。その人の教養が大海原のようであろうが、山間の湖水のようであろうが、また小さい露のようなものであろうが問題ではありません。わたしたちがどんな器であったとしても「神に満ちているもののすべてをもって満たされる」ことができます。聖書によって、神に満たされる人の特質について学びたいと思います。

良心の強化

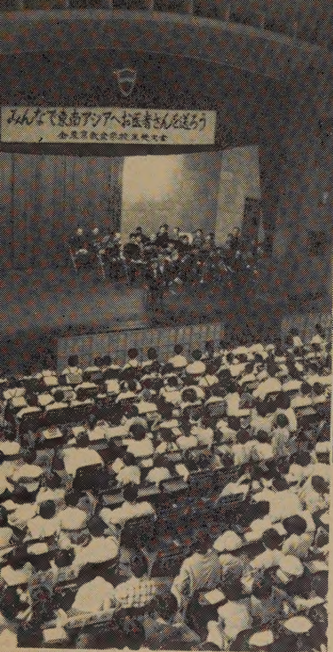
　「御霊により力をもって内なる人を強くして下さる」。この「内なる人」を直ちに良心と同一にすることは少し無理かも知れません。しかし良心はその内なる人を形づくる最も大きな要素です。

　良心にはこれを指導していくものが必要です。良心それ自身だけでは十分でありません。船の進路を定める羅針盤の近くに鉄屑があったりすると、その針を狂わせ、指示している方向が当てにならないことがあります。そうした時には、六分儀を使って、太陽や星から正しい進路を割り出さねばなりません。わたしたちのまわりには、わたしたちの良心の方向に影響を与えるものがたくさんあります。そして時にその良心を狂わせ、とんでもない失敗をさせることがあります。人間の良心は時には国の法律で支えられたり、民衆の感情で支配されたりします。だが、わたしたちの良心は、そのようなものの裏附けで強められるものであってはなりません。それは「御霊によって強められる」ものです。たえずみことばをとおして御霊の指示される方向に従っておらねばなりません。よし法律は是としても、御霊に従う良心はそれを是とすることができない時もあるはずです。千万人が構わないと考えても、強められた良心には耐えられないこともあるはずです。現代はとかく良心の喪失時代といわれます。神に満たされるものは良心にいつも正しい方向を与え、たえずそれを強化していかねばなりません。

キリストの内住

　「信仰によってキリストが心の内に住み」。神に満たされる者は、キリストをつねに内に住まわせる人でなくてはなりません。何によってそれができるのでしょうか。はっきり、「信仰によって」としるされています。

　信仰によってキリストはわたしたちの心に住んでくださるのです。信頼のないところに交わりはありません。信じられないところにキリストはお留まりにはなりません。わたしたちは、自分の心をすっかり主にあけわたさねばなりません。心のいちばん奥の部屋の鍵までも主にお委ねもうさねばなりません。それなのに、いろんな客がそこを占領し、そこ





→ケンちゃんと共に教会学校は休まないようにしようねと語る野田市朗牧師





美しい色の韓国の正装で献金をささげる大韓キリスト東京教会の生徒と自校のプラカードをかかげながらハリキッて献金する子供たち
↓

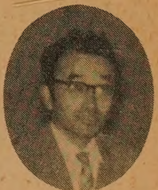




第11回 キリスト教教育週間

東京生徒大会





去る九月二四日貢例の教育週間生徒大会が青山学院の講堂で開催された。参加校は一一九校、手に手に自校の名を書いたプラカードを持って続々とのり込んで来る。救世軍の大人と子供の編成になるブラスバンドの奏楽に、満員の会場はひきしまった。東京都会連盟外崎長三郎会長の挨拶聖ルカ病院内科医長日野原重明博士の「貴重なる生命を大切にし、それがいつも健康であるようにし、他人の生命をも私たちは大切にし、健康であるよう祈り行動しよう」とのアピールがあり、キリスト者医科連会長の野村実博士、シュヴァイツアー病院の高橋功博士から「昨年の献金でシュヴァイツアー病院に日本館が出来ます」との報告がされた。つづいて今度ネパールに行く若い岩村昇医師が、「僕が子供の時、教わった日曜学校の先生が『誰かこの組からお医者さんになってキリストの御用をする人はないか』と云ったのを、最近になって強く思い出すのですが、もう亡くなられたその先生の祈りが、僕をいつの間にかこう導いたのでしょう」と語り「君たちも価値ある人間として生きてくれ」と呼びかけ、子供たちの献金をささげる列や讃美歌をうたう顔を見て感激の涙をいっぱいため、ネパールで立派にやりとげてきますと語っていました。献金総額二三万二千九〇八円でした。



（写真中は岩村昇先生、下は、説教する日野原博士と後方右より高橋博士、野村博士、左は外崎会長）

昭和二十八年八月十日第三種郵便物認可
昭和三十六年十一月一日発行
発行人 山北多喜彦
印刷所 精文堂印刷株式会社
教会教育 第一〇〇号
定価五〇円（〒共）
半年分 三〇〇円
一年分 五五〇円
発行所
東京都中央区銀座四の二
日本基督教協議会 教会学校部
振替東京九八七一三番